

白口経塚遺跡

—第4・5・6次調査—

久留米市荒木町白口所在遺跡の発掘調査報告

久留米市文化財調査報告書 第147集

1998. 12

久留米市教育委員会



(1)第4次調査S I 30・P 1 遺物出土状況（南から）



(2)第4次調査S I 30・P 1 出土の土師器碗

白^{しら}口^{くち}経^{きょう}塚^{づか}遺^い跡^{せき}

—第4・5・6次調査—

1998. 12

久留米市教育委員会

序

豊かな水と緑に囲まれた久留米市は、古来より生活環境に恵まれ、先人たちの残した貴重な足跡である文化財が数多く存在しています。

白口経塚遺跡の所在する荒木町白口は、久留米市街地の南端に位置し、昭和42年に久留米市に編入合併されるまでは三潞郡筑邦町に属していました。荒木校区内には、二子塚古墳や鷺塚古墳に代表される前方後円墳を始め、市指定の有形民俗文化財である白口の地蔵菩薩彫像板碑など、古代から中世に至る数々の歴史資料が存在します。

ここに報告する白口経塚遺跡は、古代律令体制下における「荒木郷」の中心部に推定される場所に位置し、今回の調査でも飛鳥～鎌倉時代にかけての竪穴住居・掘立柱建物・井戸などの生活跡から多くの土器が出土しています。これらは地域の歴史解明には欠くことのできない資料であり、将来も大いに活用されるべきものであります。

最後になりましたが、発掘調査に際して多大なご協力・ご理解をいただいた久留米市農業協同組合代表理事組合長の池田登氏をはじめ、関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成10年12月28日

久留米市教育委員会

教育長 桑 野 善 吾

例 言

1. 本書は、久留米市教育委員会が、久留米市農業協同組合（代表理事組合長・池田登）の委託を受けて実施した、白口経塚遺跡第4・5・6次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、久留米市教育委員会が主体となり、教育文化部文化財保護課の白木守が担当した。
3. 本書に使用した遺構図は白木、荒巻美智代・井上喜代香・高田知恵が作成し、遺物の実測、及び図面類の清書は白木が作成した。
4. 遺構・遺物の写真は白木が撮影した。なお、本文中の遺物番号と写真図版の遺物番号は同一である。
5. 本書に記した方位はすべて座標北である。また、基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。
6. 本書に使用した遺構表記は下記の略号による。

S B ……掘立柱建物	S D ……溝	S E ……井戸
S I ……竪穴住居	S K ……土坑	S P ……ピット
S X ……その他の遺構		
7. 調査に関わる遺物・記録類は、すべて久留米市埋蔵文化財センターに収蔵・保管され、活用される予定である。
8. 本書の執筆・編集は白木が担当した。

調 査 次 数	略 記 号	調査番号
白口経塚遺跡第4次調査	S K T - 0 0 4	1 9 9 7 3 9
白口経塚遺跡第5次調査	S K T - 0 0 5	1 9 9 8 1 1
白口経塚遺跡第6次調査	S K T - 0 0 6	1 9 9 8 1 7

遺物実測図及び観察表凡例

《遺物実測図》

- ・実測図のトーンは以下の材質を示す。

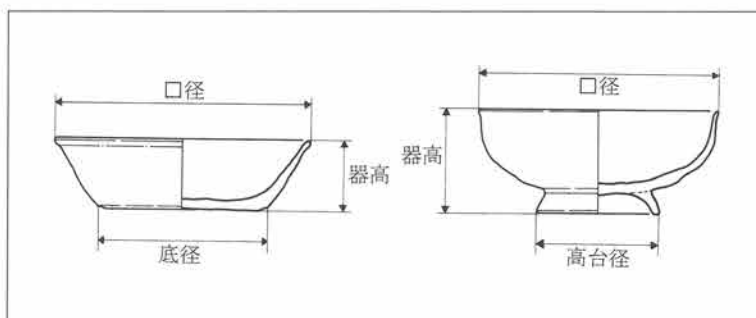
断面黒塗り		須恵器
断面トーン		瓦 器
内面トーン		内黒土器（黒色土器A類）
外面トーン		丹塗り土器

- ・実測図の線は以下の調整を示す。

—— ——— ———		ヨコナデ
—— ——— ———		ケズリ

《遺物観察表》

- ・陶磁器の色調は釉色を表す。
- ・胎土は、1 mm未満の砂粒を微砂粒、1～2 mm程度の砂粒を細砂粒とした。
- ・陶磁器の分類は下記の文献によった。
横田賢次郎・森田 勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—形式分類と編年を中心として—」
『九州歴史資料館研究論集4』 1978年
- ・口径・底径・器高の数値はcmである。また（ ）内の数値は現存値を示す。
- ・口径・底径・器高は下記の部位を示す。



本文目次

I. はじめに	1
a. 調査に至る経過	1
b. 調査の体制	1
c. 調査の方法	2
d. 調査の経過	2
e. 白口経塚遺跡の調査略歴	3
II. 位置と環境	4
a. 地理的環境	4
b. 歴史的環境	4
III. 第4次調査	6
a. はじめに	6
b. 検出遺構と出土遺物	6
c. 小 結	14
IV. 第5次調査	16
a. はじめに	16
b. 検出遺構と出土遺物	17
c. 小 結	20
V. 第6次調査	22
a. はじめに	23
b. 検出遺構と出土遺物	23
c. 小 結	25
VI. まとめ	27
報告書抄録	28

挿 図 目 次

第1図	白口経塚遺跡調査区位置図 (1/2,500)	3
第2図	白口経塚遺跡を中心として見た周辺の遺跡分布図 (1/25,000)	5
第3図	S D10・50断面実測図 (1/40)	6
第4図	第4次調査遺構配置図 (1/100)	7
第5図	S D10・50出土遺物実測図 (1/4)	8
第6図	S B95実測図 (1/80)	8
第7図	S B100・105実測図 (1/80)	9
第8図	S B95・100・105出土遺物実測図 (1/4, 1/2)	10
第9図	S I 20実測図 (1/60)	10
第10図	S I 30・90実測図 (1/60)	11
第11図	S I 20・30・90・120出土遺物実測図 (1/4, 1/2)	12
第12図	S K15・25・45実測図 (1/20, 1/40)	13
第13図	S K15・ピット出土遺物実測図 (1/4)	13
第14図	第5次調査遺構配置図 (1/100)	16
第15図	S D 5・25断面実測図 (1/40)	17
第16図	S D 5・25出土遺物実測図 (1/4)	17
第17図	S E35実測図 (1/60)	17
第18図	S E35出土遺物実測図 (1/4)	18
第19図	S K20・30実測図 (1/40)	19
第20図	S K30・ピット出土遺物実測図 (1/4)	19
第21図	S P10・15実測図 (1/20)	20
第22図	第6次調査遺構配置図 (1/100)	22
第23図	S I 10実測図 (1/60)	23
第24図	S I 10・S K15出土遺物実測図 (1/4)	23
第25図	S K15・20実測図 (1/40)	24
第26図	S K15・20出土遺物実測図 (1/4)	24
第27図	ピット出土遺物実測図 (1/4)	25

表 目 次

第1表	第4次調査出土遺物観察表(1)	14
第2表	第4次調査出土遺物観察表(2)	15
第3表	第5次調査出土遺物観察表	21
第4表	第6次調査出土遺物観察表	26

図 版 目 次

巻頭図版 (1)第4次調査S I 30・P 1 遺物出土状況(南から)

(2)第4次調査S I 30・P 1 出土の土師器碗

図版1 (1)第4次調査区全景(南から)

(2)S D10㊸土層断面(南から)

(3)S D10㊹土層断面(南から)

(4)S D10全景(南から)

(5)S D50土層断面(南から)

図版2 (1)S B95・100・105全景(南から)

(2)S B100完掘状況(北西から)

(3)S I 20完掘状況(東から)

(4)S I 30完掘状況(北東から)

(5)S I 30・P 1 遺物出土状況(南から)

図版3 (1)S I 90完掘状況(西から)

(2)S K15遺物出土状況(南から)

(3)S K45土層断面(南から)

(4)S K45完掘状況(西から)

(5)S K25完掘状況(南から)

(6)作業風景(北から)

図版4 第4次調査出土遺物(1)

図版5 第4次調査出土遺物(2)

図版6 (1)第5次調査区全景(北から)

(2)第5次調査区全景(東から)

図版7 (1)S D 5 ㊿土層断面(南西から)

(2)S D 5 完掘状況(南西から)

(3)S P 10礫検出状況(東から)

(4)S P 15礫検出状況(西から)

(5)調査区を南から望む(南から)

(6)水没した調査区(北東から)

図版8 第5次調査出土遺物

図版9 (1)第6次調査区全景(南から)

(2)重機にる表土剥ぎ風景(東から)

(3)作業風景(南から)

図版10 (1)S I 10土層断面(南から)

(2)S I 10遺物出土状況(南から)

(3)S I 10完掘状況(西から)

(4)S K20遺物出土状況(南から)

(5)S K15土層断面(東から)

(6)S K15完掘状況(東から)

図版11 第6次調査出土遺物

I. はじめに

a. 調査に至る経過

本調査は、平成9年6月30日付けで久留米市農業協同組合代表理事組合長 池田登氏より、久留米市荒木町白口2295-2・2295-3・2372における、事務所・倉庫・給油所建設に先立つ、埋蔵文化財包蔵地の事前審査依頼書が提出されたことに始まる。依頼地は周知の遺跡である白口経塚遺跡の範囲内に含まれ、遺構の存在が予想されたため、市教育委員会では7月14日に試掘調査を実施した。その結果、竪穴住居・土坑・ピットなどの遺構が多く検出され、土器等の出土も認められた。事務所・倉庫予定地における基礎工事はパイプ打ち、また給油所予定地ではタンクが埋設されるため、盛土等による現状保存は困難であり、発掘調査が必要である旨を依頼者側に回答した。

その後、依頼者側と協議を重ねた結果、野菜の出荷や事務所引っ越しの都合上、平成10年の3月に倉庫建設予定地（第4次）、6月に給油所建設予定地（第5次）、8月に事務所建設予定地（第6次）の発掘調査を行うことで合意した。調査が2年度に跨がるため、平成9年度は平成10年2月12日付で、また平成10年度は平成10年6月10日付で、久留米市農業協同組合池田登氏と、久留米市長白石勝洋との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約書を取り交わし、調査に入る運びとなった。

b. 調査の体制

調査委託：久留米市農業協同組合 池田 登（代表理事組合長）

調査主体：久留米市教育委員会 教育長 桑野 善吾

調査総括：教育文化部	部 長	坂田 博春	社会教育担当部長	矢次 敏孝
文化財保護課	課 長	古賀 幸男	主 査	萩原 裕房
	文化財主査	富永 直樹	庶務担当	古賀 直喜
	試掘調査担当	富永 直樹	調査担当	白木 守
	整理担当	畠中 和子		

発掘調査臨時職員

荒巻美智代・井上喜代香・緒方喜代子・亀山 菊枝・川原紗綾子・川原セキヨ・末安ヨシミ
 富松登美子・中園 敬子・野口カオル・平島ツヤカ・深川幾代美・船津 實子・森 一二三
 森 フミヨ・森 美佐子・森 美代子
 高田 知恵・倉光 繁・大坪 芳典（以上、別府大学学生）・一木 亨（九州大学学生）

発掘調査整理臨時職員

尾崎 又野・荒巻 悦子

この他、J Aくるめ総合企画室の森光佐一郎氏、大久保学氏、J Aくるめ西部営農センターの森田久光氏、J Aふくおか購販連の山脇昌智氏には、諸手続き、及び調査の進行に際して種々のご配慮を頂いた。

また、本田光子助教授（別府大学文学部）には出土遺物の顔料についてご教示を賜り、山村信榮氏（太宰府市教育委員会）には出土遺物に関するご教示を賜った。記して感謝いたします。

c. 調査の方法

第4～6次調査とも、以下の手順で調査を実施した。

表土は重機により除去した。遺構検出作業、平板による略図作成(1/50)の後、人力で遺構の掘り下げを行った。遺構の掘り下げが終了した段階で調査区内の清掃を行い、スカイマスター(高所作業車)により調査区の全体写真撮影を実施した。遺構の測量、写真撮影を終えた時点で重機により調査区の埋め戻しを行った。

個別遺構図・及び土層図は1/10・1/20で作成し、その他の遺構平面図の作成、及びエレベーションは遺跡調査汎用システム「カタタ」により測量し、そのデータは「カタタ3DC」に記録・保存している。遺構写真は必要に応じてカラーリバーサル35mm、モノクロ35mm・6×7により撮影し、全体写真のみカラーリバーサル6×7を加えた。

d. 調査の経過

《第4次調査》

- 1998年2月23日 重機により表土の除去を開始する。旧倉庫のコンクリート基礎が広がっており、予想外に手間取る。(～25日)
- 26日 発掘器材を搬入し、テントの設営を行う。遺構の検出作業開始。地山土が柔らかいため作業は比較的し易い。
- 27日 溝・竪穴住居の掘り下げを開始する。また並行してトータルステーションにより攪乱と調査区の測量を実施する。
- 3月2日 竪穴住居・ピットの掘り下げ、遺構の測量、写真撮影、土層図の作成を精力的に実施する。(～16日)
- 17日 翌日の写真撮影に備え、調査区内の清掃を実施。またテントを解体し、大半の発掘器材を撤収する。
- 18日 スカイマスターによる調査区の全景写真撮影を実施。撮影終了後、重機により調査区南側を一部拡張し、総柱建物(SB100)の全容を検出する。柱穴掘り下げの後、図面作成、及び写真撮影を実施。(～21日)
- 23日 調査区の埋め戻しを行い、本日をもって現地調査を終了する。

《第5次調査》

- 1998年6月15日 重機により表土の除去を開始する。全体に攪乱が著しい。
- 16日 発掘器材を搬入し、テントの設営を行う。遺構の検出作業開始。
- 17日 遺構の掘り下げを開始し、並行してトータルステーションによる測量も行う。また、個別遺構実測、写真撮影も断続的に実施。
- 25日 18日より降り続いた大雨により調査区が完全に水没した。終日、水中ポンプによる排水作業に追われる。(～29日)
- 7月2日 前日の雨で調査区が水没。早朝から作業員に出てもらい、排水作業、及び調査区内の清掃を行う。その後、スカイマスターにより調査区の全景写真撮影を実施。撮影終了後、発掘器材を撤収し、本日をもって現地調査を終了する。

《第6次調査》

1998年8月3日 重機により表土の除去を開始する。調査区の大半は粘土採りによる攪乱が見られる。

4日 遺構検出作業の後、遺構の掘り下げを行う。並行してトータルステーションによる測量も開始する。(～6日)

7日 調査区内の清掃を行い、スカイマスターによる全景写真撮影を実施。

10日 重機による調査区の埋め戻しを行い、本日をもって現地調査を終了する。

e. 白口経塚遺跡の調査略歴

本遺跡では、今回の調査以前に都合3度の発掘調査が実施されている。諸般の事情で調査報告書が刊行されていないため、詳細は不明であるが、以下、簡単に概要について触れておく。

第1次調査は、昭和51年5月25日～7月30日まで、雇用促進住宅建設に先立って調査が実施された。対象面積5,555㎡の内に、井桁状のトレンチを設定した結果、少量の土師器・須恵器等が出土したものの、さしたる遺構は確認されていない。なお遺物の主体は中世であった。

第2次調査は、昭和51年11月8日～12月1日まで、分譲住宅開発予定地の確認調査として実施された。縦横に数本のトレンチを入れた結果、飛鳥～奈良時代にかけての溝・土坑などの遺構が確認されたため、翌年度に本調査に入る運びとなった。

第3次調査は、第2次調査区の本調査として昭和52年4月18日～7月9日まで実施された。前年度の調査で確認されていた飛鳥～奈良時代の遺構・遺物に加え、中世の溝や瓦器碗なども新たに確認された。特に井戸や廃棄土坑から出土した丹塗り土器を含む多量の土師器は7世紀末～8世紀中頃に比定されるもので、整理が進めば該期の土器編年の基準資料となり得る。また土器を焼成したと考えられる平地窯や、木片・種子類などの興味深い遺構・遺物も確認されている。



第1図 白口経塚遺跡調査区位置図 (1/2,500)

Ⅱ. 位置と環境

a. 地理的環境

白口経塚遺跡は、久留米市街地の南部に位置する荒木町白口に所在する。荒木町は昭和42年に久留米市に編入合併されるまでは、大善寺町・安武町と共に旧三潯郡筑邦町に属していた。町の中心地にはJR鹿児島本線と国道209号線が南北に走行し、遺跡の東方350mには荒木駅が所在している。さらに東方には上津・藤光ニュータウンが広域に展開し、数年前まで水田地帯であった一帯には住宅が建ち並び、急激な変貌を遂げている。

遺跡は耳納連山から西側に派生する低台地上の先端部にあり、標高10m程度を測る。現水田面との比高差は3m程である。

b. 歴史的環境

白口経塚遺跡周辺においては現在までのところ、旧石器・縄文時代の遺構・遺物は確認されておらず、人々の活動痕跡が最初に認められるのは弥生時代に入ってからである。以下、時代毎に概観する。

弥生時代の遺跡が集中する宮原遺跡・鬼木遺跡・寺脇遺跡一帯の低台地上では、前期から後期に至る集落が確認されている。特に鬼木遺跡では集落を取り囲むと考えられる環濠（後期中頃）に加え、嘉永年間（1848～54）には広形銅矛1口も出土している。また広川町との境にある天神浦からも元禄十年（1697）と享保七年（1722）の二度にわたって計18口の中広銅矛が出土しており、一括埋納と推定されている。このように権力者の存在は窺えるものの、集落構成等は不明な点が多く、今後の調査の進展を待たねばならない。この時期の墓地は向定覚遺跡で小児棺を含む16基の甕棺墓（中期中頃）が確認されている他、一の左右遺跡からは最近の調査で後期後半～終末と考えられる甕棺墓・土壇墓41基が確認され、内1基の土壇墓からはガラス小玉1,644個が出土している。

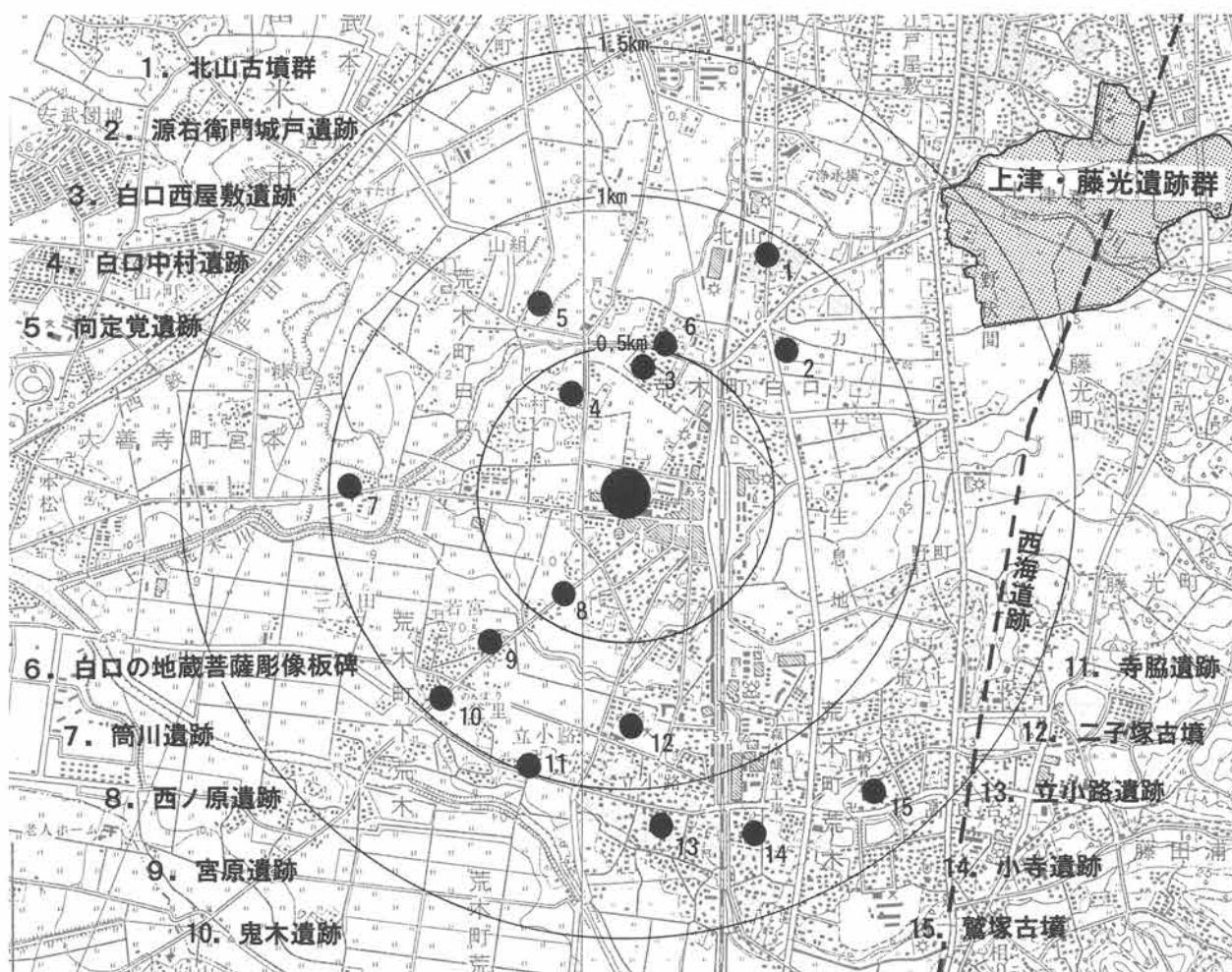
古墳時代の集落は一の左右遺跡で5世紀代の竪穴住居が確認されている他は今一つ明らかでない。一方の墳墓は、二子塚古墳・鷲塚古墳・豆塚古墳といった前方後円墳が相次いで築かれている。これらの古墳は『日本書紀』にその名が見える「水沼君」一族の奥津城と推察される御塚・権現塚古墳に続くものである。二子塚古墳は既に消滅しているが、昭和50年度の調査などから全長50m余りの、埴輪を樹立する6世紀後半に築造された前方後円墳であることが確認されている。この他にも至る所に円墳が築かれていたようであるが、後世の開墾等によって大半が消滅し、現存する古墳は数少ない。

律令期の筑後国は10郡を管轄し、荒木町はその中の「三潯郡」に属していた。『和名類聚抄』によれば「三潯郡」中には「荒木郷」の名が見え、その範囲は現在の荒木町一帯と考えられる。この時期の集落は本遺跡以外に旗原遺跡でも確認されている。同遺跡からは7世紀末～8世紀前半の掘立柱建物・土坑・溝などが確認されているが、竪穴住居は見つかっていない。こうした在り方は旧三潯郡域では一般的なもので、該期の竪穴住居はほとんど確認されておらず、掘立柱建物のみで集落が構成されている。また西ノ原遺跡では円面硯が出土しており、周辺に官衙的な性格を有する施設が存在したことを匂わせているが、発掘調査などは実施されておらず、詳細は不明である。また小寺遺跡の北側には、奈良時代の寺院があったと伝えられる大寺遺跡が所在するが、これも実態は不明である。律令期の産物である西海道は現在の国道209号線をほぼ踏襲するもので、近年の久留米市内や筑後市の調査などから幅9～12m程度の規模を有す

ることが確認されている。

鎌倉時代になると、文献にも名が登場する支配者層が台頭する。先ず荒木近藤氏館跡（立小路遺跡）は御家人として当地を支配していた近藤氏の館跡で、輸入陶磁器が出土している他、「荒木近藤氏文書」と呼ばれる古文書の写しも現在に伝えられている。また東側に位置する小寺遺跡では10棟以上の建物に加えて近藤氏館に向かうと考えられる道路跡も確認され、輸入陶磁器や銭貨の出土も見られる。一方、北へ目を転じれば、白口中村遺跡は一木但馬守の館跡と伝えられ、一帯では土師器や輸入陶磁器などが採集されている。この中村館跡の北東には応永11年（1404）の作で市指定文化財にもなっている「白口の地蔵菩薩彫像板碑」が祭られている。また一帯には源右衛門城戸・西屋敷・寺屋敷といった字名が現在まで伝えられている。この他、上津・藤光遺跡群内に所在する古賀前遺跡では、15～16世紀に比定される溝で区画された建物や井戸などで構成される屋敷跡が6区画以上確認されている。

以上、弥生時代から中世までの様相を時代を追って概観してきたが、荒木町における発掘調査件数はまだまだ少ないために実資料にも乏しく、地域の歴史解明にも充分な裏づけがなされていない。また古墳に代表されるように、大半の遺跡が調査されることもなく消滅しており、過去からのメッセージを充分にくみ取れないのが現状である。



第2図 白口経塚遺跡を中心として見た周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

Ⅲ. 第4次調査

a. はじめに

倉庫建設に先立ち、342m²を調査した。調査区の北端、及び東端は粘土採掘による攪乱が見られ、中央付近には旧倉庫の基礎が列状に並ぶ他は、遺構の残存状況は概ね良好であった。表土はレンガ・バラス混じりの灰褐色土が15~20cm堆積し、その下に10~15cm程度の黒色土の堆積が認められる。また調査区の北西部が表土から30cm程度で遺構検出面に達するが、南東に移行するに従って深みを増し、南東隅では50cm程度に達する。

b. 検出遺構と出土遺物

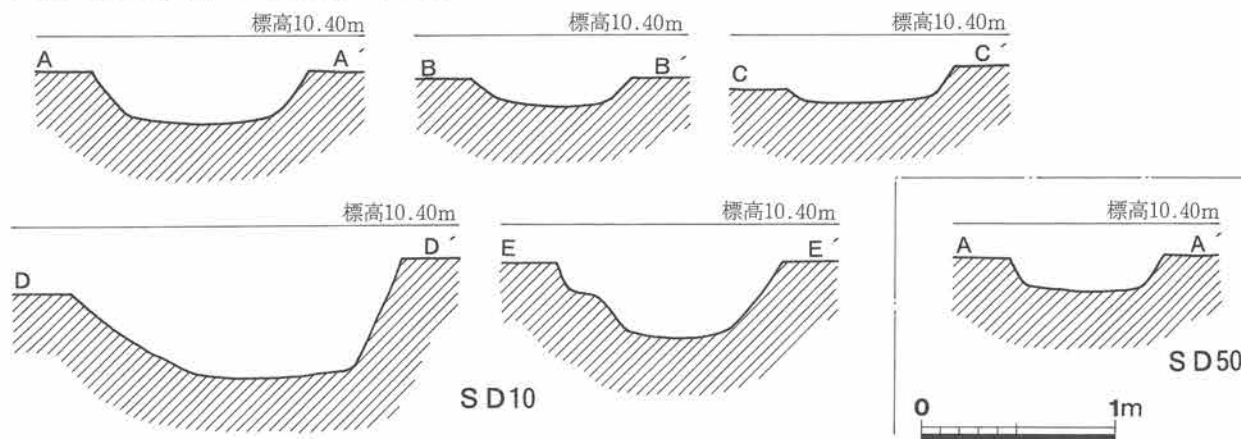
溝2条・掘立柱建物3棟・竪穴住居4棟・土坑3基・樹木倒壊痕2基・ピットを検出した。出土遺物は全体でパンコンテナ6箱程度で、SD10から最も多く出土した。

溝

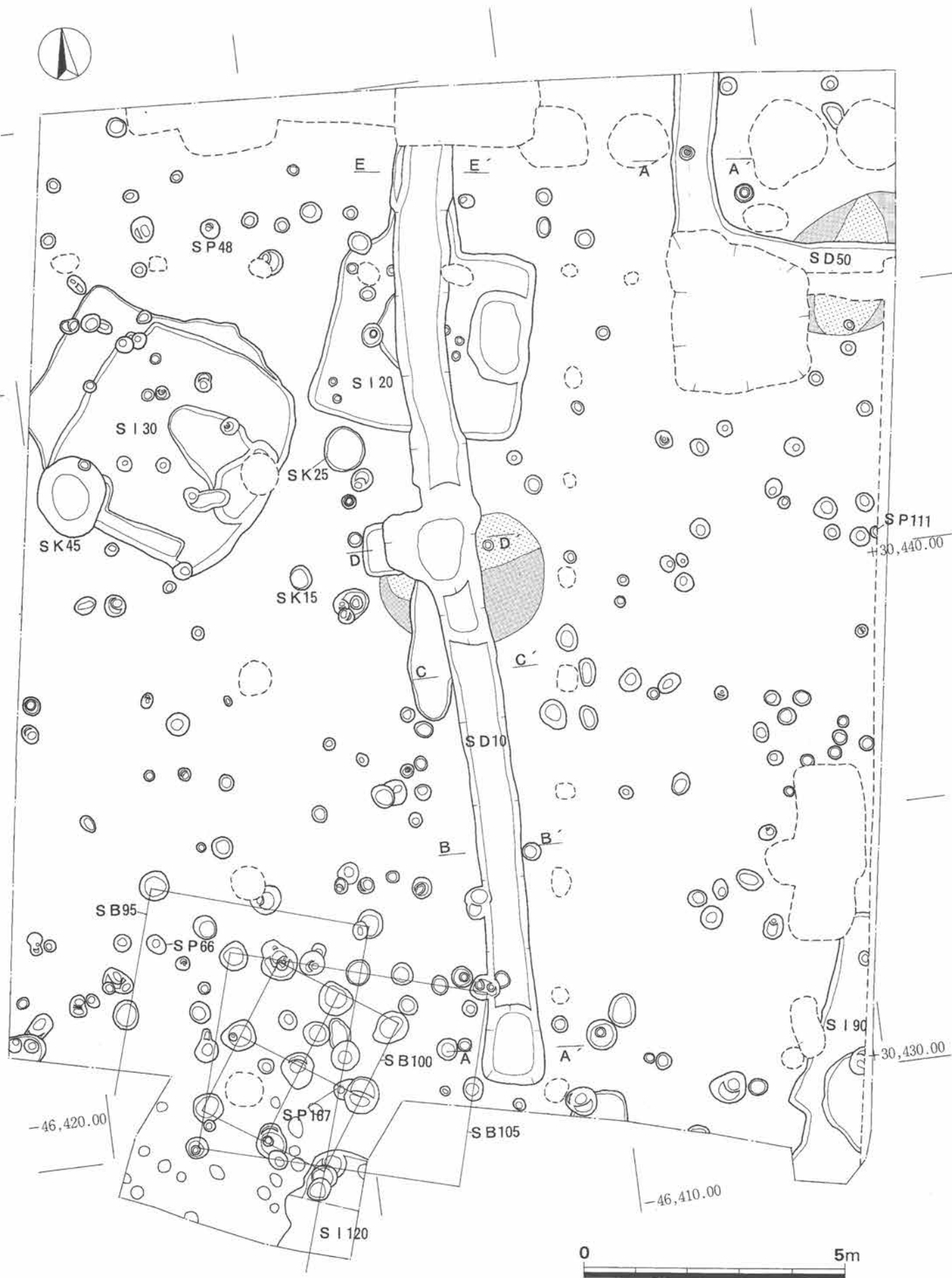
SD10 (第3図, 図版1) 調査区の中央を南北に走行する溝で、18m以上を検出した。幅80cm~1m以上に達し、深さは20~30cm程度を測る。溝の南端は一段深く掘り込まれ、また中央付近では深さ60cm以上に及ぶ。底面は北へ移行するに従って深みを増し、調査区内で20cm程度の高低差が確認できる。埋土は黒褐色土で、底面近くは暗褐色土である。パンコンテナ2箱程度の遺物が出土し、土師器小皿・坏・高坏・甕、須恵器蓋・壺、白磁碗・皿、瓦器碗などが見られる。遺物の8割近くは奈良時代の遺物で占められるが、輸入陶磁器や瓦器も含まれることから後出する時期の所産と考えられる。また土師器の皿では糸切り底は認められず、溝の最終的な埋没は12世紀初頭~前半頃と考えられる。

SD10出土遺物 (第5図, 図版4) 2は底部ヘラ切りの丸底を呈する小皿である。3は脚で断面は円形を呈する。4~8は底部押し出し技法の瓦器碗で、5・6は糸切り離し後に底部を押し出す。また5は高台の畳付に細い板状の圧痕が認められる。9は白磁碗Ⅳ類。10は白磁皿Ⅲ類で、口縁端部は外反し、見込みは釉を輪状に掻き取る。11は青白磁の小壺で、外面には蓮弁状のケズリを施す。口縁端部と体部下半は露胎。

SD50 (第3図, 図版1) 調査区の北東隅で検出した溝で、南西のコーナーは粘土採掘坑に切られている。幅80cm、深さ20cmを測り、断面は緩やかな逆台形を呈する。埋土は暗褐色土で、底面のレベル差は



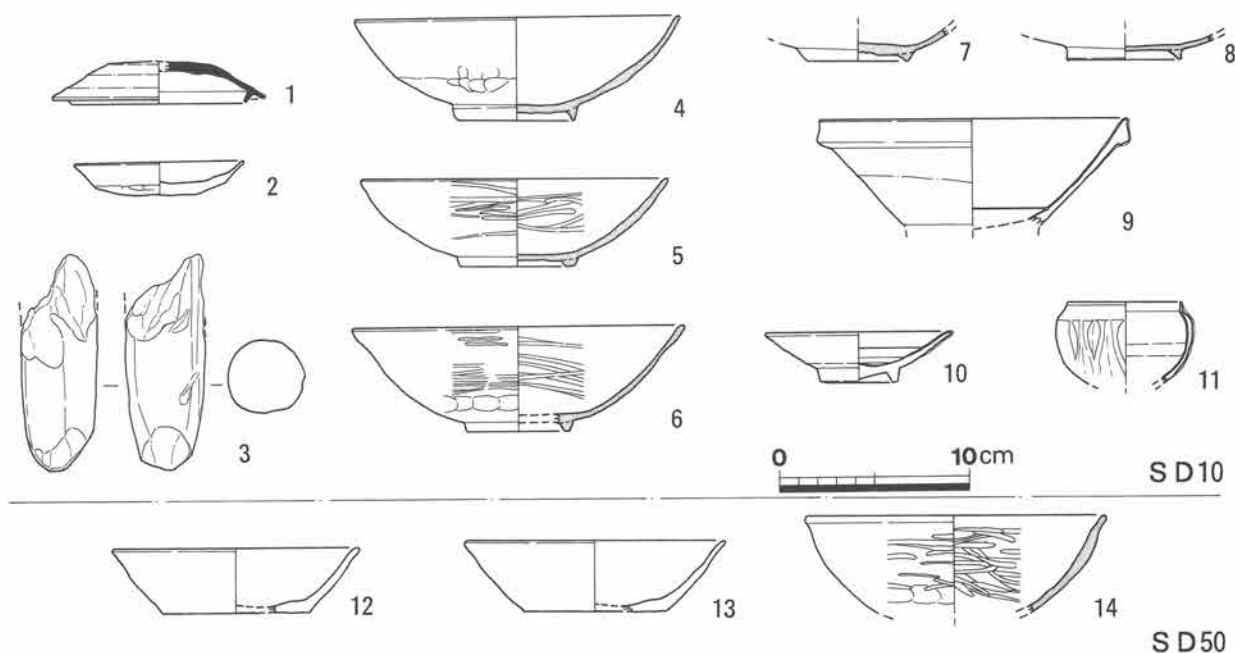
第3図 SD10・50断面実測図 (1/40)



第4図 第4次調査遺構配置図 (1/100)

溝の両端ではほとんど認められない。土師器皿・坏・甕、瓦器碗などが出土しており、S D10とほぼ同時期の溝と考えられる。

S D50出土遺物（第5図，図版4） 12・13は底部ヘラ切りの坏である。14は瓦器碗で内外面ともに粗いミガキを施す。



第5図 S D10・50出土遺物実測図 (1/4)

掘立柱建物

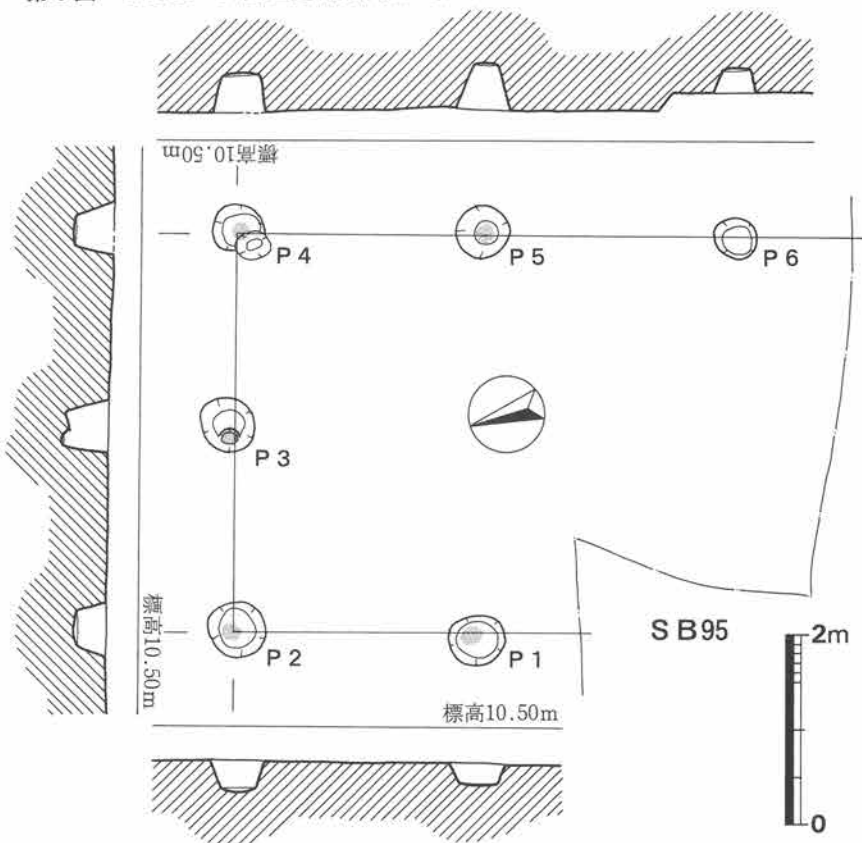
S B95（第6図，図版2）

梁間2間、桁行3間以上の規模を持つ南北棟建物で、S B100より後出する。柱間の寸法は梁間が7尺、桁行が9尺で計画され、方位はN-18度-Eである。柱の掘形は径40~50cmの円形を呈し、深さは25~50cmを測る。またP6を除いて径20cm程度の柱痕が確認されている。出土遺物は土師器の甕類が多く、図示できる遺物は少ない。

S B95出土遺物

（第8図，図版4）

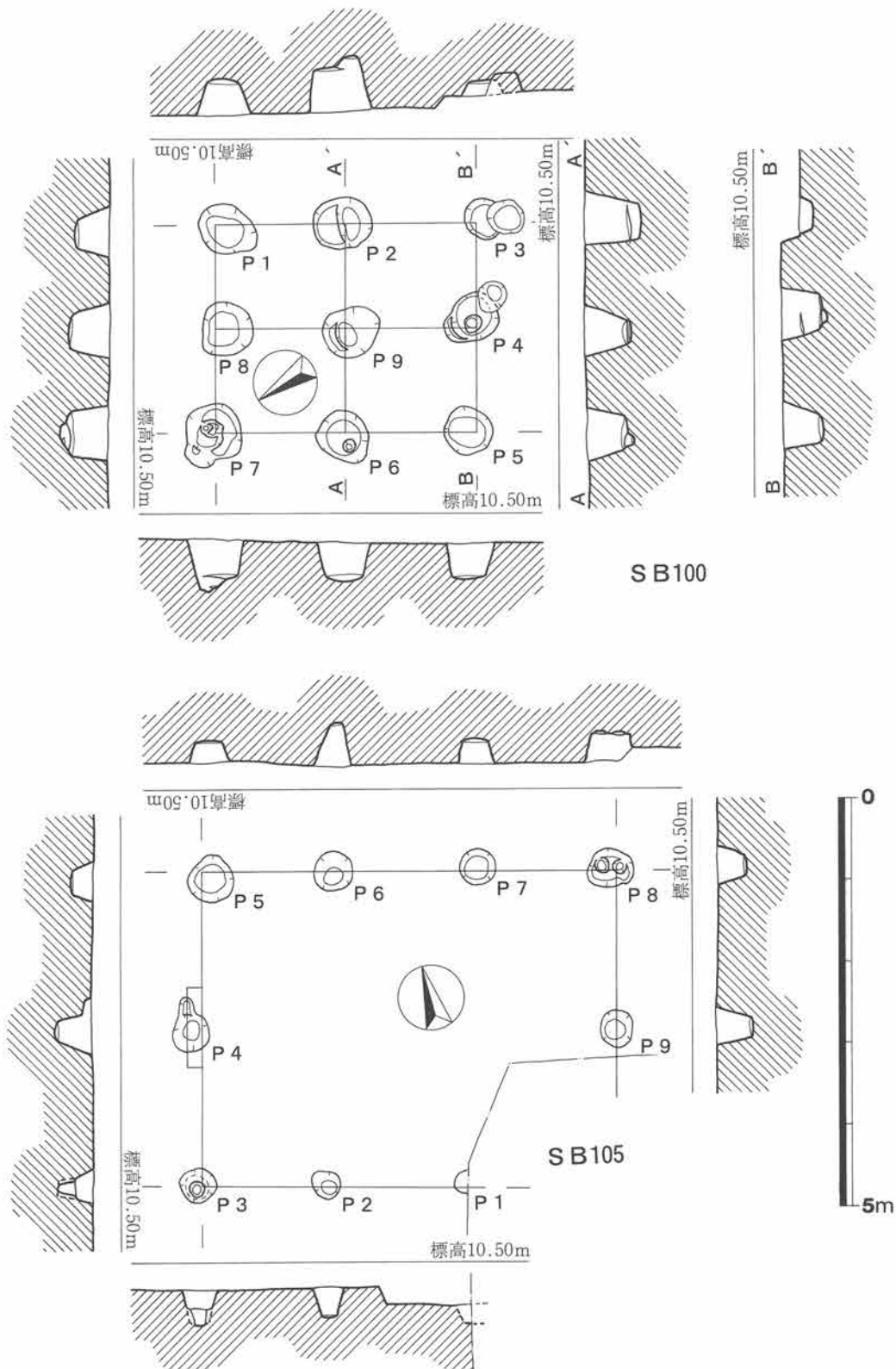
15は須恵器碗で、力強い高台を貼り付ける。16は甑の底



第6図 S B95実測図 (1/80)

と考えられる。

SB100（第7図，図版2） 桁行2間×梁間2間の総柱建物で、SB95より先行する建物である。規模は桁行長3.20m、梁間長2.60mを測り、計画方位はN-35度-Eである。柱の掘形は径40～60cmの円形



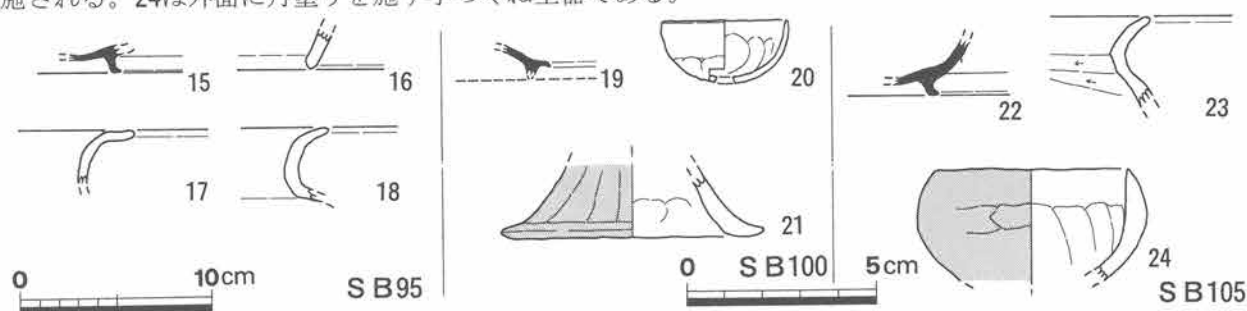
第7図 SB100・105実測図 (1/80)

を呈し、深さは40～60cmを測る。出土遺物は土師器の甕が大半で、手づくね土器や丹塗り土器片も少量出土している。

S B100出土遺物（第8図，図版4） 19は須恵器蓋で返し先端部を欠く。20は底部に焼成前の径4mm程度の穿孔が施される。21は丹塗りの高坏でかなり小振りである。

S B105（第7図，図版2） 梁間2間×桁行3間の東西棟建物と考えられ、梁間の中心柱はやや外側に張り出す。また桁行の柱間は梁間に比べて狭く計画されている。方位はN-74度-Wである。柱の掘形は径35～50cmの円形を呈し、深さは30～60cmとバラツキがある。また柱痕は確認されていない。切り合い関係がないためにS B95とS B100との先後関係は不明である。出土遺物は土師器の甕類が多いが、図示できる遺物は少ない。

S B105出土遺物（第8図，図版4） 22はしっかりした高台を有する椀で、体部下半にヘラケズリが施される。24は外面に丹塗りを施す手づくね土器である。



第8図 S B95・100・105出土遺物実測図（1/4，1/2）

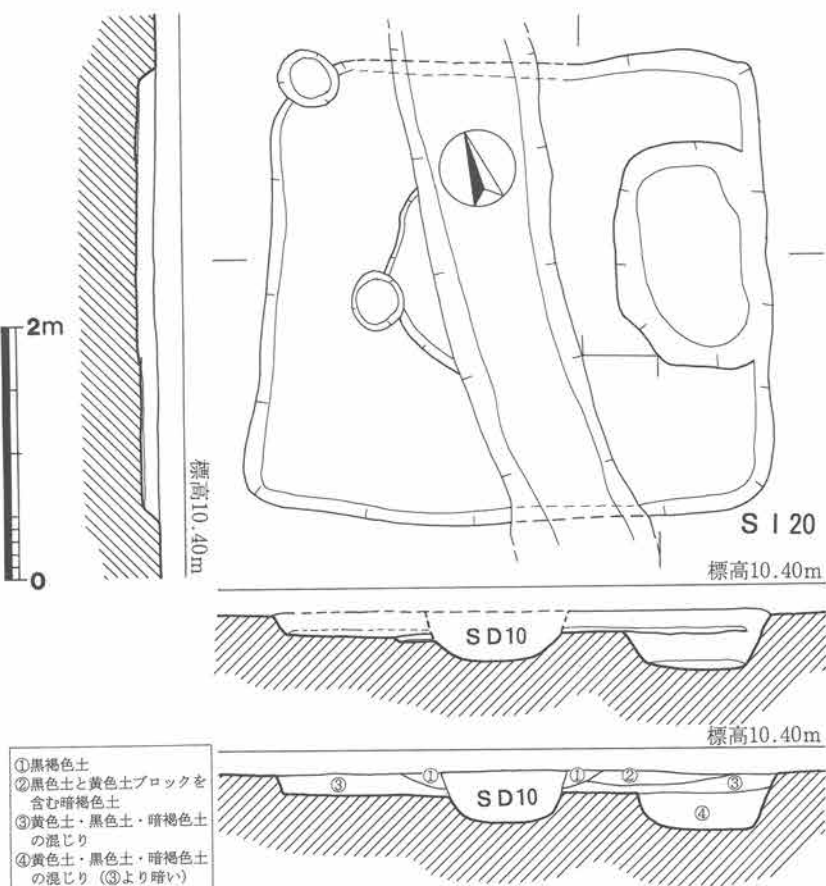
竪穴住居

S I 20（第9図，図版2）

一辺が4 m弱の平面プランが方形を呈する住居跡で、中央はS D 10に切られる。柱穴は確認できなかったが、東側の壁際に屋内土坑が検出された。またカマドも確認されなかったが、配置から見て溝によって削平されている可能性も考えられる。埋土は自然堆積で、貼床の痕跡も認められない。出土遺物は土師器の甕が大半で、須恵器は甕の小破片が1点見られるのみである。

S I 30（第10図，図版2）

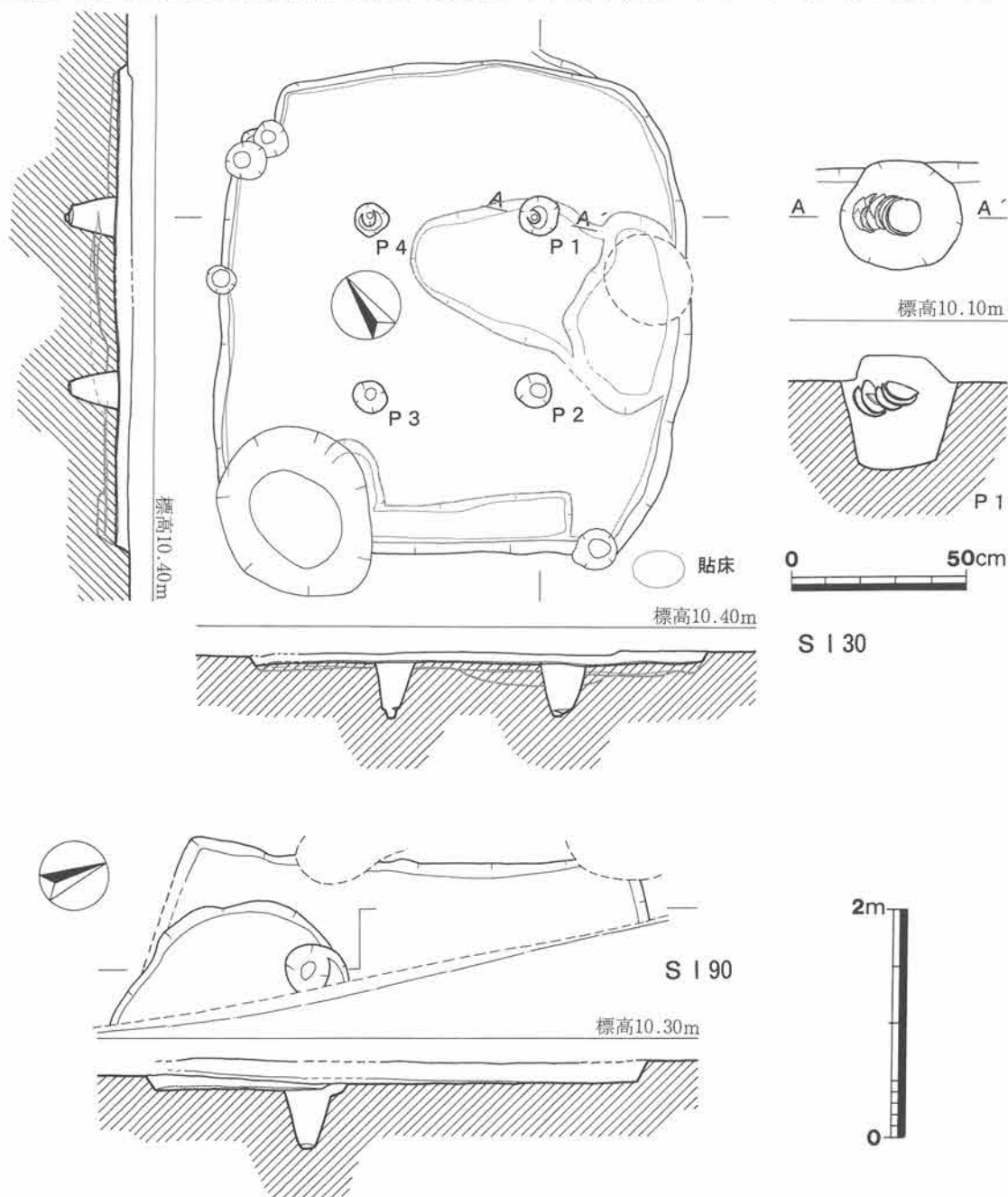
S I 20の西側で検出した、平面プランが方形を呈する住居跡で、一辺が約4 mを測る。深さは現状で10cmと残り具合は悪い。床面に



第9図 S I 20実測図（1/60）

は黒色土・褐色土・黄色土による貼床がなされているが、硬化は進行しておらず、比較的柔らかかった。貼床の下からは2カ所の浅い凹みが確認できた。柱穴は4本柱で、掘形は径30cmの円形を呈し、深さは50cmに達する。このうち北東隅の柱穴（P1）からは土師器碗5個体がまとまって出土した。碗は底面から15cm程浮いた状態で横向きに重ね置かれていた。また柱穴は人為的に埋め戻されており、且つ碗の出土位置が柱穴の中央であることから、これらの碗は住居を建てる際の地鎮具ではなく、廃絶時の祭祀行為に伴うものと考えられる。

S I 30出土遺物（第11図、図版4・5） 27は坏身で底部には回転ヘラケズリを施し、「N」状のヘラ記号も認められる。蓋との判別が困難であるが、床面からこの状態で出土したことから身として報告した。30～34はP1から出土した土師器碗である。底部はいずれも手持ちヘラケズリで、その後にナデ押えを施



第10図 S I 30・90実測図 (1/60)

している。また見込みにはコテあて痕も見られる。35は鉄鏃もしくは刀子の基部と考えられるが、切先や刃部は認められない。

S I 90 (第10図, 図版3) 調査区の南東隅で検出した住居跡で、上面は各所で攪乱を受けている。西壁の残り具合から見て一辺4 m程度の方形プランになるものと考えられる。深さは20cm程度で、南西隅から径40cm、深さ60cm近い柱穴も確認されている。出土遺物の大半は土師器の甕類で、底部に回転ヘラケズリを施す坏も2点出土している。8世紀中頃の住居跡と考えられる。

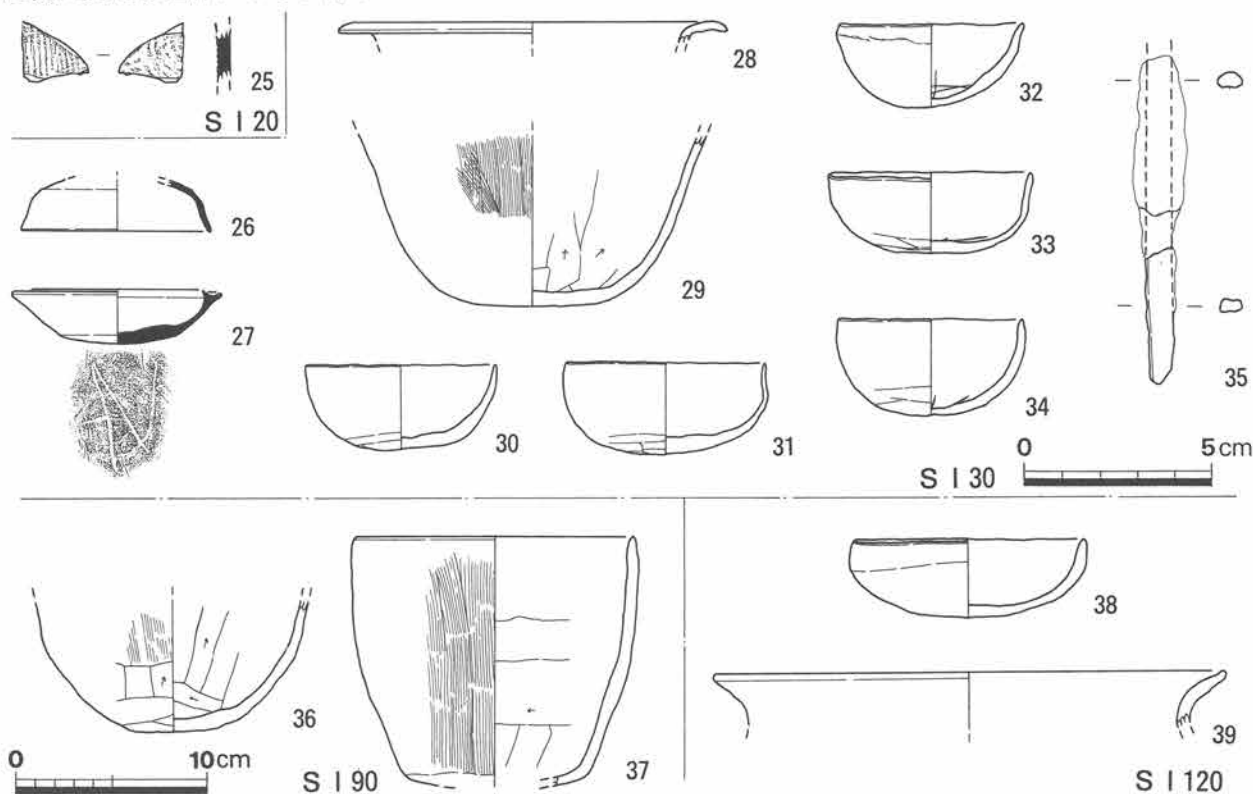
S I 90出土遺物 (第11図, 図版5) 36は底部外面にケズリを施す甕である。37は鉢で底部外面はナデ押え。

S I 120 (第4図) 調査区南端の拡張部分で検出した遺構で、一部を掘り下げたのみで全容は不明であるが、ここでは住居跡として取り上げた。深さは25cmを測る。S B 95・100・105とは切り合い関係にあるが、先後関係はつかめなかった。出土遺物は土師器の甕が大半である。時期は7世紀末～8世紀初頭の住居と考えられる。

S I 120出土遺物 (第11図, 図版5) 38は丸底の碗で、口縁部のすぐ下から手持ちヘラケズリが施される。

土坑

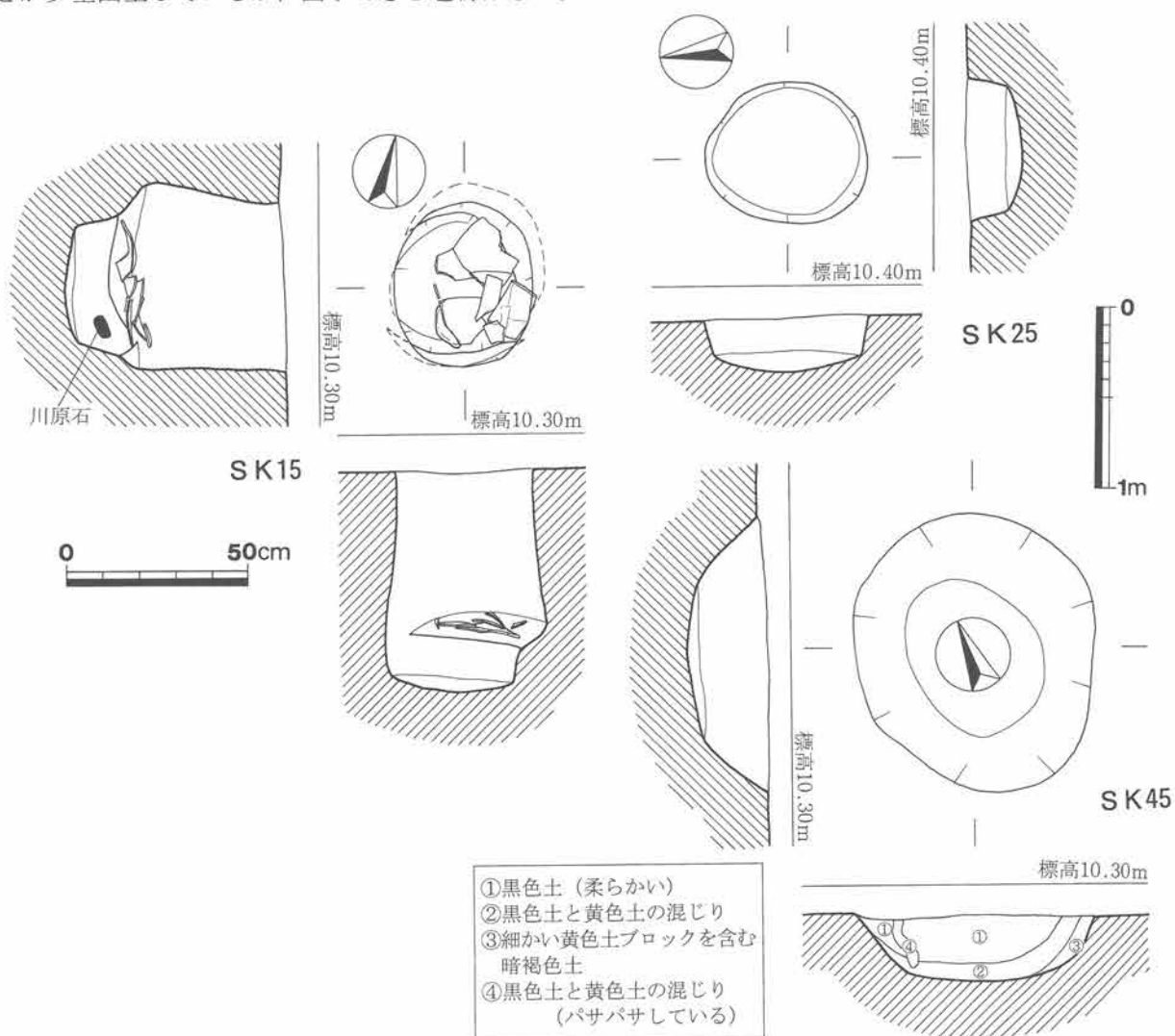
S K 15 (第12図, 図版3) S I 30の東側で検出した土坑で、平面プランは径38～45cmの楕円形を呈する。深さは60cmと深く、北東部はややオーバーハング気味に掘られている。埋土は柔らかい黒褐色土で細かい黄色土も少量含まれており、人為的に埋められたものと考えられる。底面近くからは土師器の甕が押しつぶされた状態で出土し、その下には川原石が置かれていた。火葬墓の可能性も考えられるが、出土した甕は完全な個体にはなり得ないため、ここでは土坑として取り上げた。



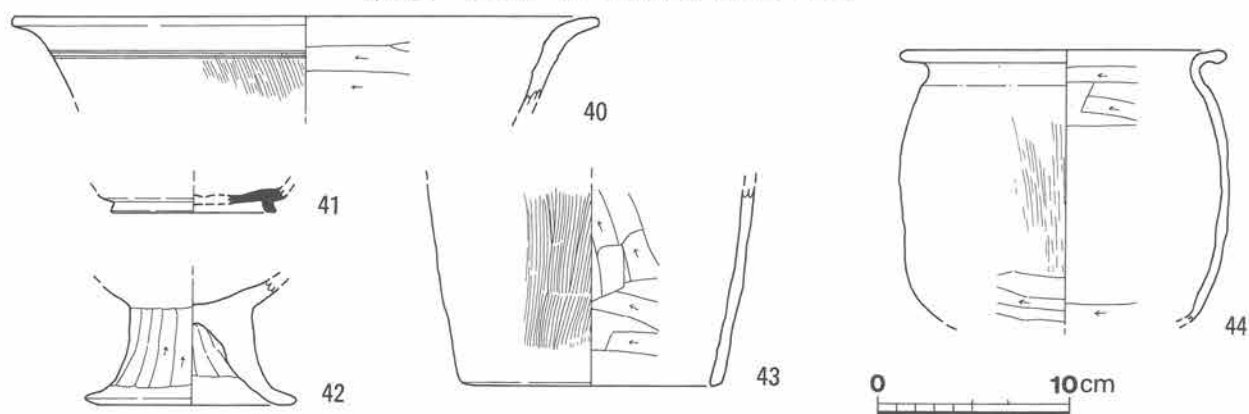
第11図 S I 20・30・90・120出土遺物実測図 (1/4, 1/2)

S K15出土遺物（第13図） 40は傾きから判断して鍋と考えられる。口縁部にはヨコナデ後に2条の沈線状のものが廻る。

S K25（第12図，図版3） S K15の北側に位置する土坑で、平面プランは径80～90cmの楕円形を呈する。深さは中心部で30cmを測り、底面はレンズ状を呈する。埋土は暗褐色土で、土師器の甕・甑・竈片などが少量出土しているが、図示できる遺物はない。



第12図 S K15・25・45実測図（1/20，1/40）



第13図 S K15・ピット出土遺物実測図（1/4）

SK45 (第12図, 図版3) **SI30**を切る土坑で、平面プランは楕円形を呈する。埋土は黒色土が主体で自然堆積と考えられる。出土遺物は土師器の甕の細片が10点見られるのみで、時期が特定できる遺物は皆無である。

ピット

ピット出土遺物 (第13図, 図版5) **42**は高坏の脚部で、外面には縦方向のケズリを施す。**43**は甕の底部である。

c. 小 結

今回の調査では飛鳥～奈良時代、及び平安～鎌倉時代の遺構・遺物が確認された。ここでは紙面の都合もあり、前者について簡単に触れておく。

竪穴住居や掘立柱建物の検出から見て、この第4次調査区は集落の中心部分に位置するものと考えられる。また竪穴住居と掘立柱建物の関係が共伴なのか変移なのか興味を引くところであるが、最も先行する**SB100**は規模から見て倉庫と考えられ、竪穴住居に伴うものと思われる。一方の**SB95・105**は2間×3間の規模が想定され、床面積から見て主屋としての機能が想定される。とすれば竪穴から掘立への居住形態の変遷が窺われる貴重な事例として位置づけられよう。

第1表 第4次調査出土遺物観察表(1)

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	遺物登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第5図	SD10	須恵器	蓋	9.6		2.3	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色	青灰色	細砂粒	天井部ヘラ切り離し ヘラ記号あり	199739 -00006
2 第5図	SD10	土師器	小皿	9.0	7.0	1.8	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄色	淡黄色	多量の赤色粒子	底部ヘラ切り離し	199739 -00003
3 第5図	SD10	土師器	脚	(11.5)	4.3	4.0	ナデ押え	ナデ押え	橙 色	橙 色	多量の角閃石 5mm程度の砂粒		199739 -00005
4 第5図	SD10	瓦 器	椀	17.2	6.6	5.6	ナデ押え	ナデ押え	黄褐色	黄褐色	細砂粒		199739 -00008
5 第5図	SD10	瓦 器	椀	16.3	6.4	4.3	ナデ押え ミガキ	ナデ押え ミガキ	薄灰色～ 黒灰色	薄灰色～ 黒灰色	5mm程度の砂粒		199739 -00009
6 第5図	SD10	瓦 器	椀	17.6	5.7	5.6	ナデ押え ミガキ	ナデ押え ミガキ	黒灰色	薄灰色	微砂粒		199739 -00010
7 第5図	SD10	瓦 器	椀		6.3	(1.8)	ナデ押え	ナデ押え	薄黄色	薄黄色	細砂粒		199739 -00011
8 第5図	SD10	瓦 器	椀		6.1	(1.4)	ナデ押え	ナデ押え	淡黄色～ 淡桃色	淡黄色～ 淡桃色	微砂粒		199739 -00012
9 第5図	SD10	白 磁	碗	16.4	7.2	(5.7)	ケズリ	ケズリ	乳白色	乳白色	黒色粒子を含む白 色	碗IV類	199739 -00013
10 第5図	SD10	白 磁	皿	10.0	4.3	2.7	ケズリ	ケズリ	空色を帯び た白色	空色を帯び た白色	黒色粒子を含む白 色	皿III類	199739 -00014
11 第5図	SD10	青白磁	小壺	6.0		(4.4)	ケズリ	ケズリ	薄い空色	薄い空色	微砂粒を含む白色		199739 -00015
12 第5図	SD50	土師器	坏	13.2	7.9	3.5	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	暗橙褐色	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り離し	199739 -00037
13 第5図	SD50	土師器	坏	13.8	7.5	3.8	ヨコナデ	ヨコナデ	淡黄褐色	暗橙褐色	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り離し	199739 -00036
14 第5図	SD50	瓦 器	椀	15.8		(5.2)	ナデ押え ミガキ	ナデ押え ミガキ	白灰色	白灰色	微砂粒		199739 -00038

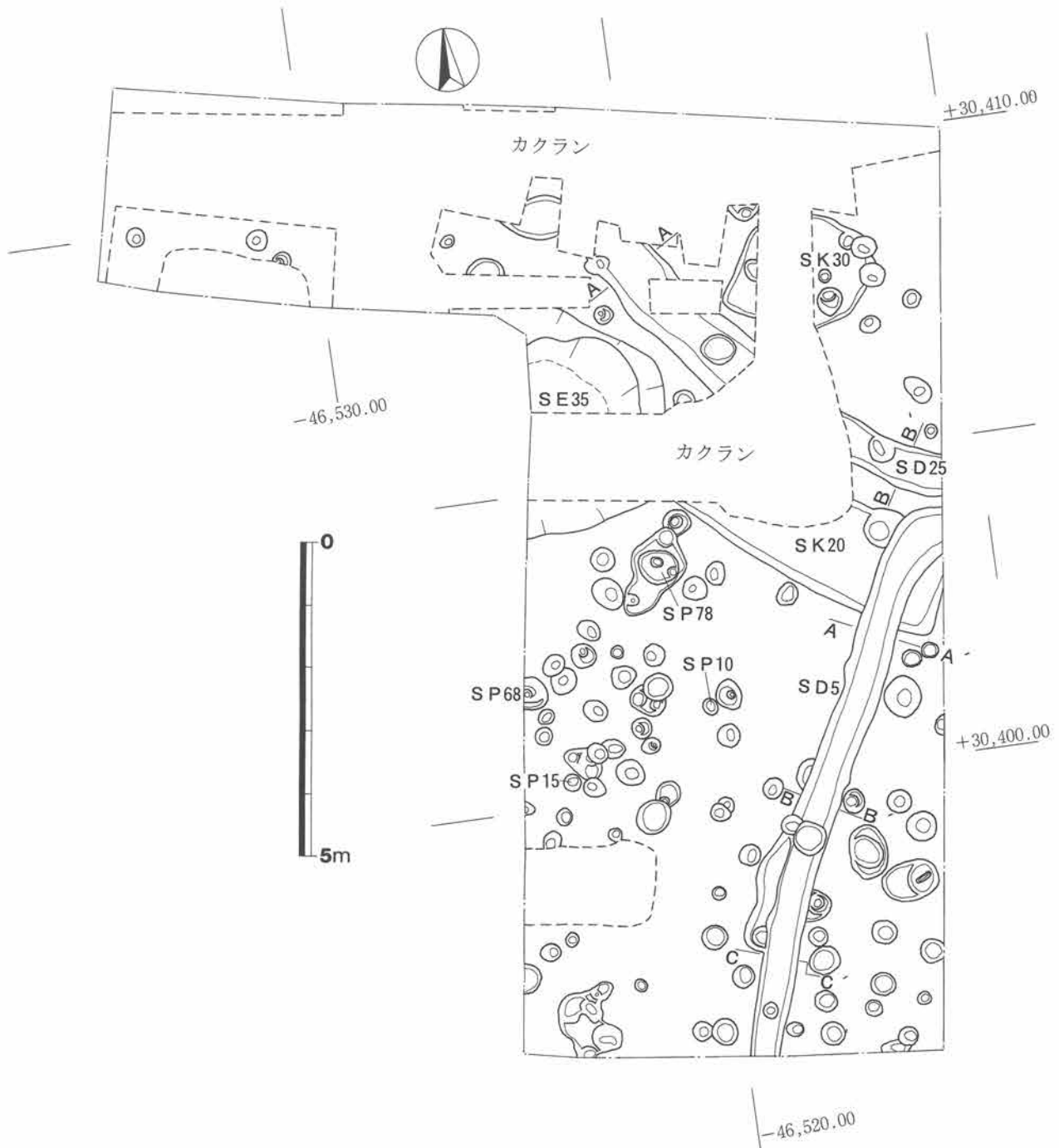
第2表 第4次調査出土遺物観察表(2)

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	遺物登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
15 第8図	SB95・P2	須恵器	碗			(1.8)	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒		199739 -00045
16 第8図	SB95・P4	土師器	甌			(2.2)	暗黄褐色	暗褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ケズリ	角閃石 細砂粒		199739 -00046
17 第8図	SB95・P2	土師器	甕			(2.8)	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	角閃石 細砂粒		199739 -00044
18 第8図	SB95・P5	土師器	甕			(3.9)	橙 色	橙 色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ケズリ	角閃石 5mm程度の砂粒		199739 -00047
19 第8図	SB100・P4	須恵器	碗			(1.7)	淡灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	天井部回転ヘラケ ズリ	199739 -00050
20 第8図	SB100・P2	手づくね土器	碗	3.0		1.7	暗褐色	暗褐色	ナデ押え ケズリ	ナデ押え	微砂粒、精良	底部に焼成前の穿 孔あり	199739 -00049
21 第8図	SB100・P9	手づくね土器	高坏		7.0	(1.9)	淡橙色	淡橙色	ナデ押え	ナデ押え	微砂粒	外面丹塗り	199739 -00051
22 第8図	SB105・P5	須恵器	碗			(3.0)	暗灰色	明灰色	回転ナデ ヘラケズリ	回転ナデ	多量の細砂粒	底部回転ヘラケズリ	199739 -00054
23 第8図	SB105・P5	土師器	甕			(4.9)	暗黄褐色	暗黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	多量の角閃石 細砂粒		199739 -00053
24 第8図	SB105・P1	手づくね土器	碗	5.0		(3.0)	淡橙色	淡橙色	ナデ押え	ナデ押え	微砂粒	外面丹塗り	199739 -00052
25 第11図	S I 20	須恵器	甕			(3.2)	淡青灰色	暗灰色	カキ目一 格子目	青海波文	細砂粒		199739 -00020
26 第11図	S I 30	須恵器	蓋	10.0		(2.8)	灰 色	灰 色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	天井部回転ヘラケ ズリ	199739 -00026
27 第11図	S I 30	須恵器	坏	9.0	6.1	2.9	淡赤褐色～ 淡黄褐色	紫灰色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	底部回転ヘラケズリ ヘラ記号あり	199739 -00027
28 第11図	S I 30	土師器	甕	20.6		(1.2)	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母 微砂粒		199739 -00023
29 第11図	S I 30	土師器	甕			(9.1)	淡橙褐色	暗褐色	刷毛目	ケズリ	赤色粒子 微砂粒	外面に煤付着	199739 -00024
30 第11図	S I 30・P1	土師器	碗	10.2		4.6	暗橙褐色	暗橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	赤色粒子 微砂粒	底部手持ちヘラケ ズリ	199739 -00029
31 第11図	S I 30・P1	土師器	碗	10.6		4.9	暗橙褐色	暗橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	赤色粒子 微砂粒	底部手持ちヘラケズリ 外面に引っ掻き傷あり	199739 -00030
32 第11図	S I 30・P1	土師器	碗	10.0		4.5	暗橙褐色	暗橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	赤色粒子 微砂粒	底部手持ちヘラケ ズリ	199739 -00031
33 第11図	S I 30・P1	土師器	碗	10.9		4.4	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	赤色粒子 微砂粒	底部手持ちヘラケ ズリ	199739 -00032
34 第11図	S I 30・P1	土師器	碗	9.9		5.2	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	赤色粒子 微砂粒	底部手持ちヘラケ ズリ	199739 -00033
35 第11図	S I 30	鉄製品	鉄鏃	(8.7)	0.7	0.4							199739 -00028
36 第11図	S I 90	土師器	甕			(7.0)	黄褐色～ 赤褐色	黄褐色～ 赤褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	多量の角閃石 細砂粒		199739 -00041
37 第11図	S I 90	土師器	甕	14.6	9.8	(13.3)	暗黄色～ 暗褐色	暗黄色～ 暗褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 細砂粒		199739 -00042
38 第11図	S I 120	土師器	碗	12.1		4.2	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ケズリ	微量の角閃石 多量の赤色粒子	底部手持ちヘラケ ズリ	199739 -00057
39 第11図	S I 120	土師器	甕	27.0		(3.0)	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ ケズリ	角閃石 3mm程度の砂粒		199739 -00056
40 第13図	SK15	土師器	鍋	31.0		(5.1)	薄橙色	褐 色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	赤色粒子 細砂粒		199739 -00016
41 第13図	SP111	須恵器	坏		8.7	(1.4)	黒灰色	黒灰色	回転ナデ ケズリ	回転ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り離し	199739 -00055
42 第13図	SP167	土師器	碗		11.2	(6.7)	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ ケズリ	角閃石 細砂粒		199739 -00059
43 第13図	SP48	土師器	甌		15.8	(10.6)	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	微量の角閃石 3mm程度の砂粒	外面に煤付着	199739 -00035
44 第13図	SP66	土師器	甕	17.1	14.1	14.4	橙褐色～ 暗黄褐色	橙褐色～ 暗黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	微量の金雲母 細砂粒		199739 -00039

IV. 第5次調査

a. はじめに

給油所建設に先立ち、120m²を調査した。調査区は全体的に旧給油所の基礎等による攪乱が著しく、特に北側が顕著であった。コンクリート基礎、及びバラスの下に黒色土が薄く堆積し、それを除去すると褐色土の検出面に達する。溝・土坑・井戸・ピット等の遺構が検出され、調査区の南側は比較的遺構の密度は高かった。



第14図 第5次調査遺構配置図 (1/100)

b. 検出遺構と出土遺物

溝2条・井戸1基・土坑2基・ピットを検出した。出土遺物は全体でパンコンテナ4箱程度で、特にS E35からまとまって出土している。

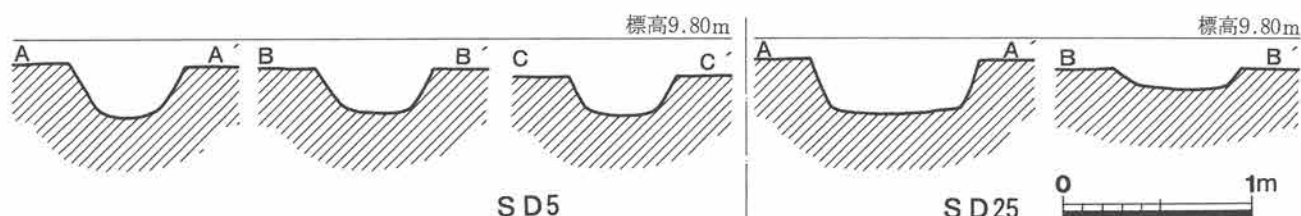
溝

SD5 (第15図, 図版7) 南北に走行する溝で、調査区の東端付近で東へ折れる。S K20より後出する。幅60cm程度で、深さは20~30cmを測り、北側がやや深みを増している。埋土は暗褐色土で、細かい黄色土を含む。土師器皿・坏・碗・甕、須恵器蓋・坏・甕などが出土し、大半が土師器で90%以上が煮炊具で占められている。

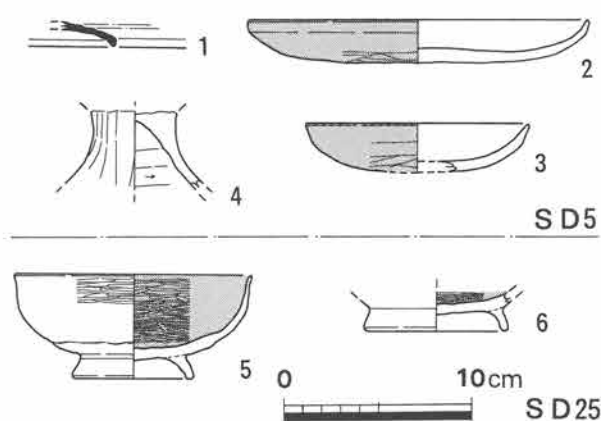
SD5出土遺物 (第16図, 図版8) 2は丹塗りの皿、3も同じく丹塗りの碗で、共に底部は手持ちヘラケズリ。4は外面にケズリによる面取りを施す高坏で、胎土は粗い。

SD25 (第15図) SD5の北側で検出した溝で、南東-北西方向に走行する。幅70~90cm、深さ10~30cm程度を測り、北側が深く掘られている。土師器碗・高坏・甕、須恵器蓋・皿・碗・高坏などが出土しており、土師器の甕類が90%以上を占める。

SD25出土遺物 (第16図, 図版8) 5・6ともに内黒の碗で、きめ細かいミガキを丁寧に施す。また5は高台の上位にヘラ切り離し痕が認められる。



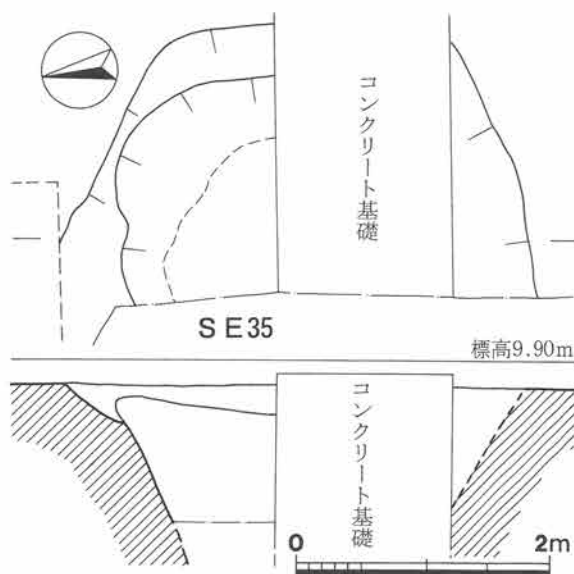
第15図 SD5・25断面実測図 (1/40)



第16図 SD5・25出土遺物実測図 (1/4)

井戸

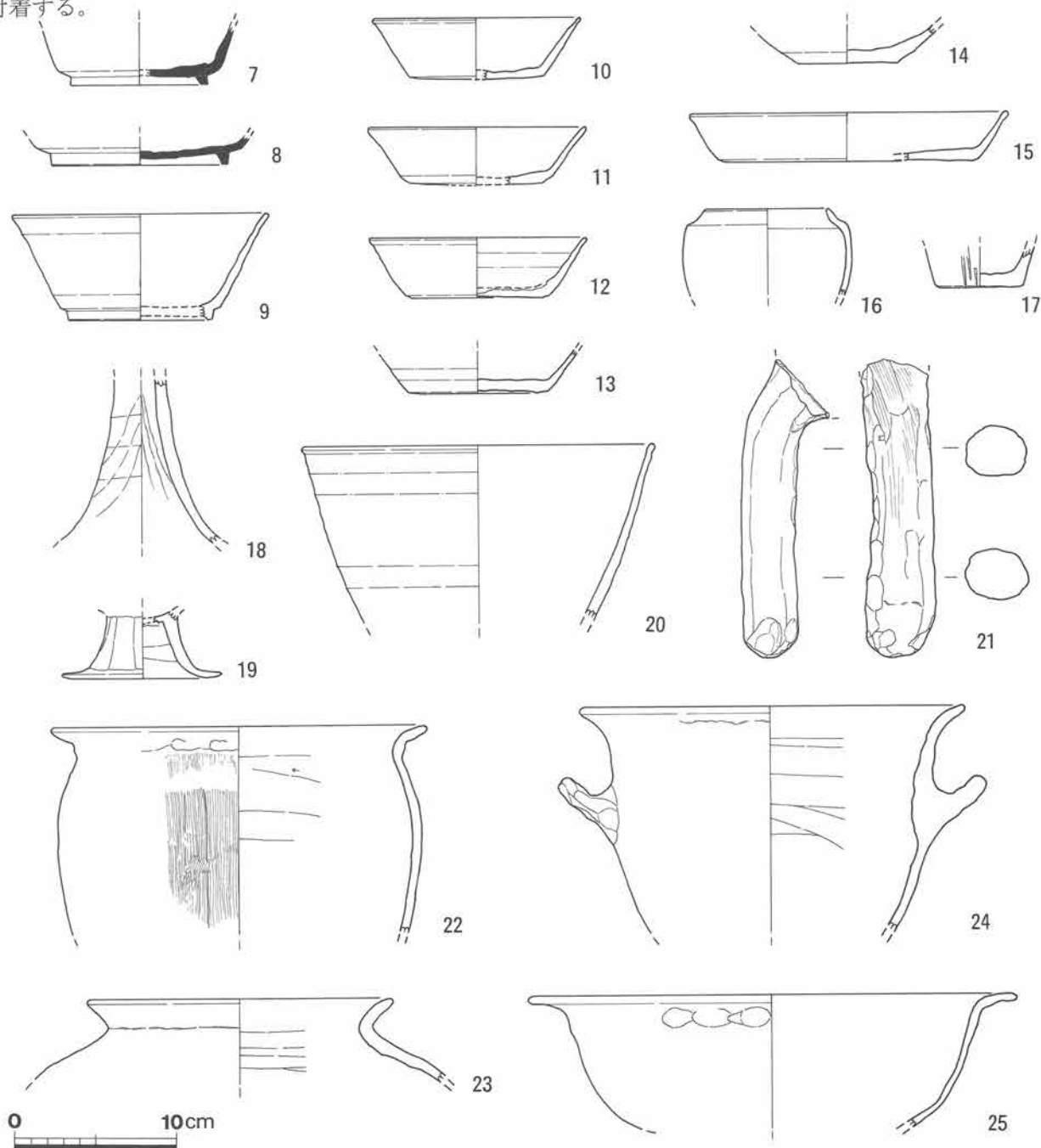
SE35 (第17図) 調査区の中央やや北寄りで検出した井戸である。中心部には旧給油所のコンクリート基礎が打ち込まれているため、北側のみ掘り下げた。推定で径3.5m程度を測る。深さは1.1mまで掘り下げたが、湧水が著しいためにポンプアップしながらの作業となり、途中で掘り下げを断念した。上層の埋土は暗褐色土で、遺物は少なかったが、80cm程掘り下げた辺りから土師器甕・坏などがまとまって出土し、遺物量



第17図 SE35実測図 (1/60)

はパンコンテナー1箱に及ぶ。大半が土師器で、須恵器は8点のみである。土師器では皿・坏・碗・鉢・高坏・甕などが見られ、供膳具の占める割合が高い。8世紀後半の所産か。

S E 35出土遺物（第18図，図版8） 9は削出高台の碗で、体部下半に面取りを施す。10～13は坏で全て底部は回転ヘラケズリ。13は底部の中心に切り離し痕が残る。14は小さな底部から大きく体部が開くタイプの坏である。16は口縁部を緩やかに立ち上げ、端部は丸みを帯びる。葉壺と考えられる。17は体部外面から底部にかけて焼成前の引っ掻き傷のようなものが数条認められる。19は外面に縦方向のケズリを施す高坏の脚部である。20は大振りの鉢で口縁端部は短く外反し、体部下半は回転ヘラケズリを施す。21は断面楕円形を呈する脚で、一部に刷毛目の痕跡も認められる。24は把手付きの甕、25は鍋で外面には煤が付着する。



第18図 S E 35出土遺物実測図 (1/4)

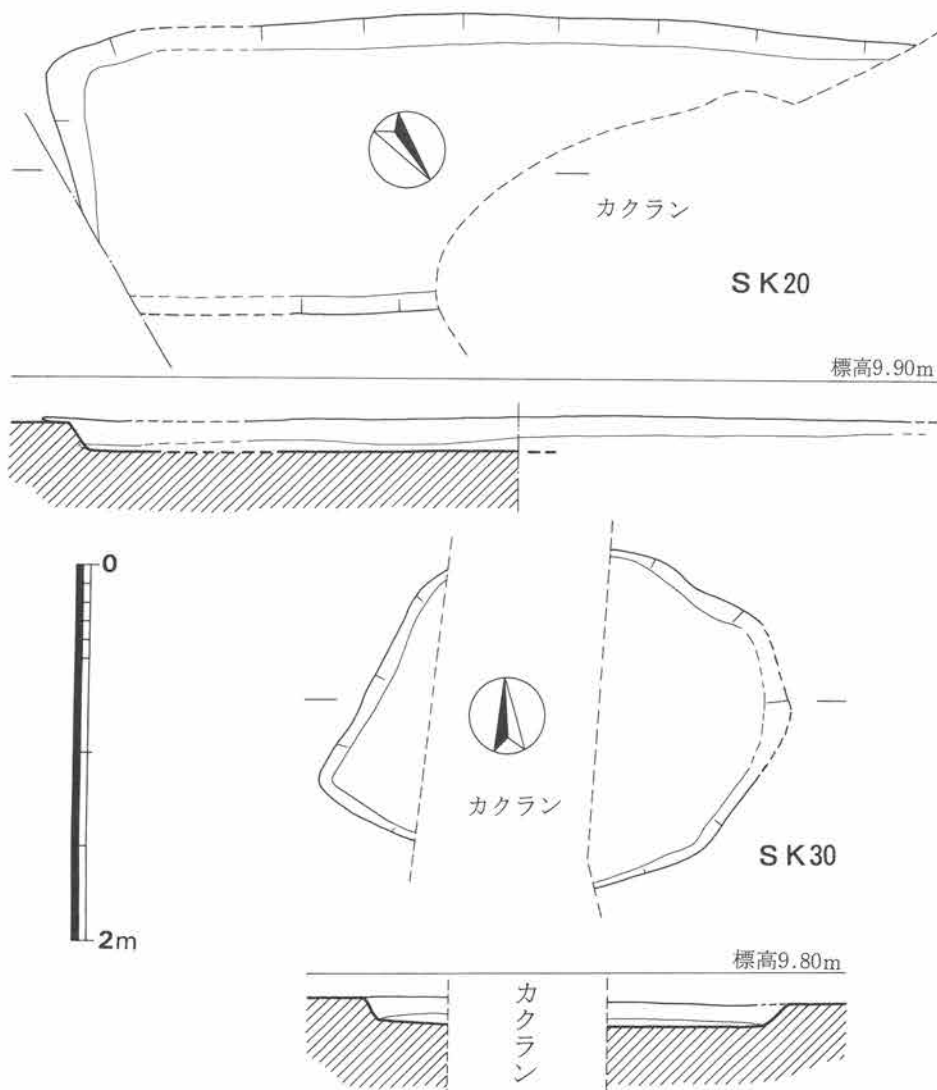
土坑

SK20 (第19図)

SD25の南側に位置する土坑で、SD5及び攪乱に切られる。規模は長軸4.6m、短軸1.5m程度になるものと考えられ、深さは15cmと浅い。埋土は黒褐色土で、出土遺物は土師器碗・甕が10点と少なく時期が決め難いものの、丸底碗が見られることから7世紀代の遺構と考えられる。

SK30 (第19図)

平面プランが不整形を呈する土坑で、中央を攪乱によって切られる。深さは15cm程度と浅く、底面は平坦である。土師器坏・碗・甕が30点程出土した。出土遺物から見て8世紀後半の土坑と考えられる。



第19図 SK20・30実測図 (1/40)

SK30出土遺物 (第20図) 26・27とも底部は回転ヘラケズリで、27は底部の中心に切り離し痕が残る。28は削出高台の碗。

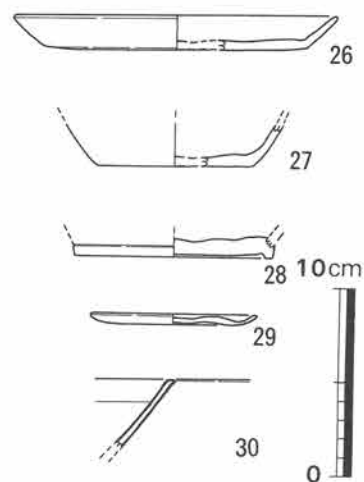
ピット

ピット中から片岩が出土したものが2カ所で確認されたため、柱穴の可能性も考えてここで報告しておく。

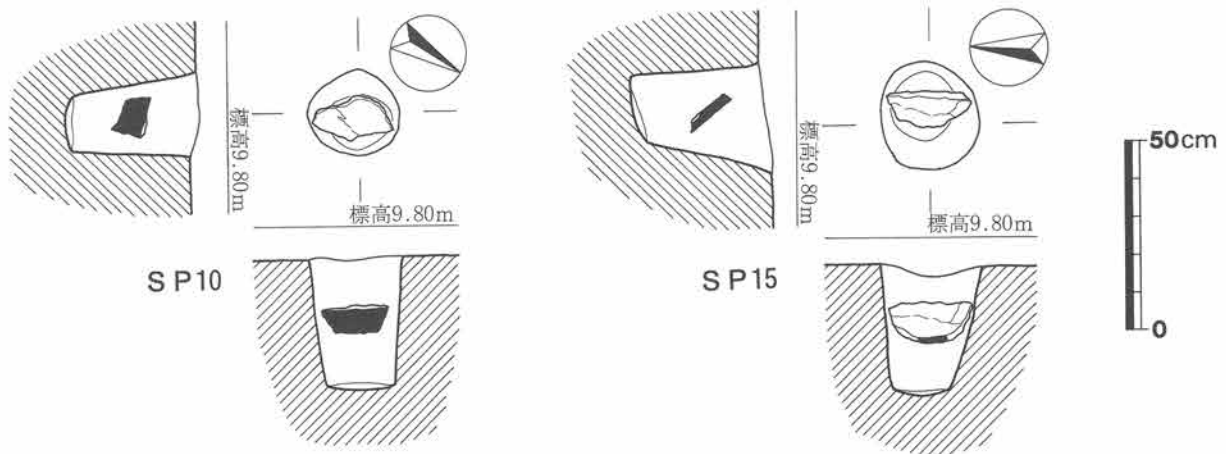
SP10 (第21図, 図版7) 径20cm程度の円形を呈し、深さは35cmを測る。底面からかなり遊離した状態で片岩が出土した。この他の出土遺物は土師器の碗・甕などが5点見られるのみで、時期が特定できる遺物は見当たらない。

SP15 (第21図, 図版7) 径25cm、深さ35cmを測り、平面プランは円形を呈する。片岩以外の出土遺物は土師器の坏・甕の細片が4点見られるのみで、図示できる遺物は皆無である。

ピット出土遺物 (第20図, 図版8) 29は糸切り底の小皿で器高はかなり低い。30は白磁碗の口縁部である。



第20図 SK30・ピット出土遺物実測図 (1/4)



第21図 SP10・15実測図 (1/20)

c. 小 結

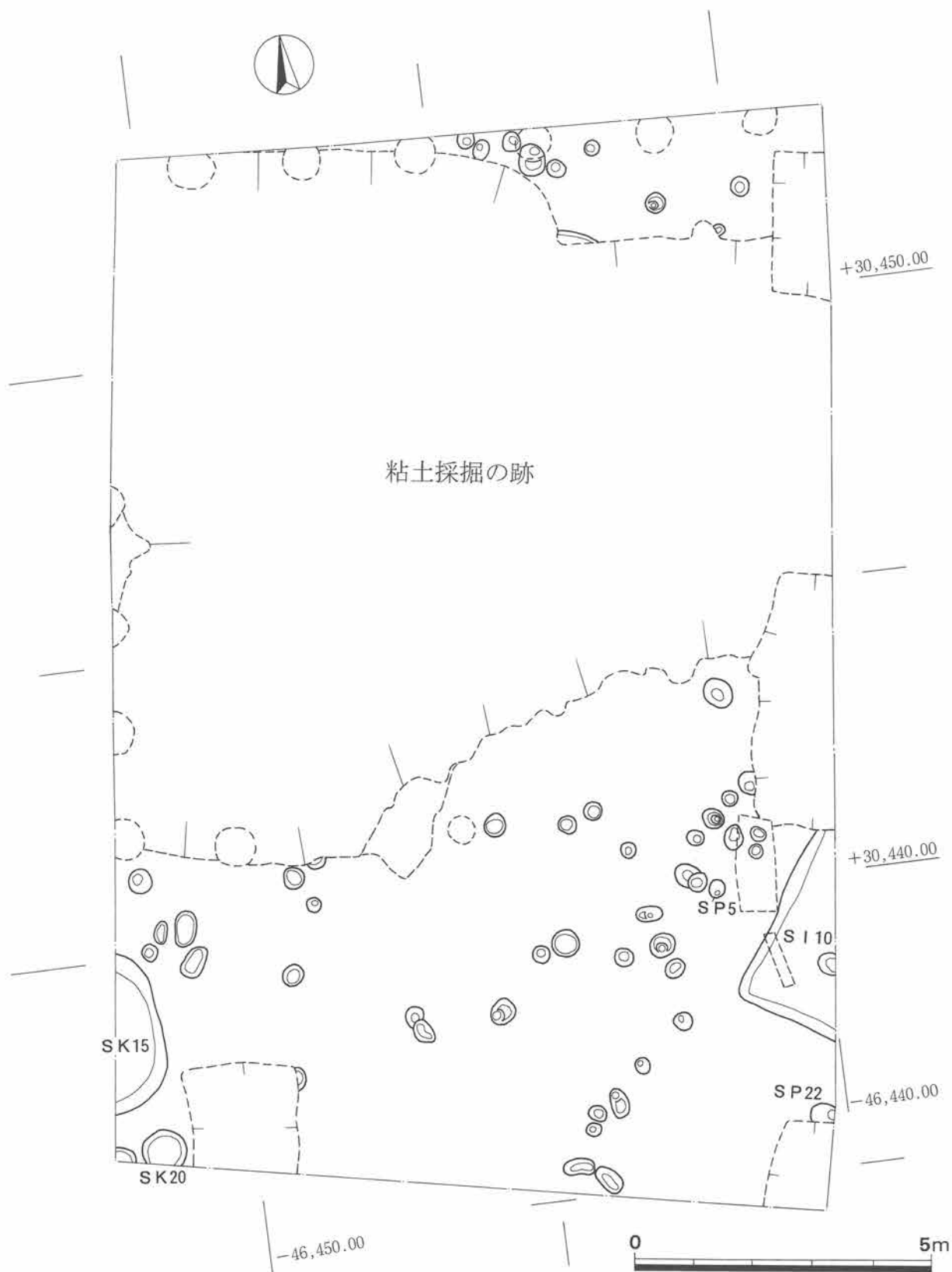
今回の調査では、飛鳥～鎌倉時代の遺構・遺物が確認された。飛鳥時代の遺構は今一つ確証はないが、S K20が最も先行する可能性がある。次いでS D5が8世紀前半に営まれ、8世紀後半にはS E35とS K30が存在する。またS E35・S K30ともに出土遺物中に供膳具の占める割合が高い点が特徴として挙げられよう。S D25は出土遺物から見て10世紀中頃に比定できるもので、本遺跡では該期の遺構はほとんど確認されておらず、貴重な知見が得られた。なお中世期ではピットから出土した白磁片と糸切り底の土師器小皿が見られるのみで、多くは語れない。

さて、今回の第5次調査区から50mほど西方が本遺跡の所在する低台地の先端部にあたる。また、南側についても徐々に低地へと移行していることから、本調査区が集落の南西部を占めるものと考えられる。

第3表 第5次調査出土遺物観察表

遺物No.	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	遺物登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第16図	SD5	須恵器	蓋			(1.4)	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	多量の微砂粒		199811 -00014
2 第16図	SD5	土師器	皿	18.0		2.3	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	外面丹塗り 底部手持ちヘラケズリ	199811 -00001
3 第16図	SD5	土師器	椀	11.8		(2.5)	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の角閃石 微砂粒	外面丹塗り 底部手持ちヘラケズリ	199811 -00004
4 第16図	SD5	土師器	高坏			(4.2)	淡黄褐色	淡黄褐色	ケズリ	ケズリ	角閃石 細砂粒		199811 -00013
5 第16図	SD25	内黒土器	椀	12.6	6.4	5.5	淡褐色～ 淡橙色	灰黒色	ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ ミガキ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り離し	199811 -00020
6 第16図	SD25	内黒土器	椀		7.6	(2.1)	明橙色	灰黒色	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り離し	199811 -00021
7 第18図	SE35	須恵器	椀		8.6	(3.9)	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	底部ヘラ切り離し	199811 -00054
8 第18図	SE35	須恵器	椀		11.1	(1.8)	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	3mm程度の砂粒 微砂粒	底部ヘラ切り離し	199811 -00055
9 第18図	SE35	土師器	椀	16.0	9.2	6.6	暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ ケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ 削出し高台	199811 -00043
10 第18図	SE35	土師器	坏	13.0	8.4	3.9	黄褐色～ 橙色	暗黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00041
11 第18図	SE35	土師器	坏	13.6	9.6	3.6	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00040
12 第18図	SE35	土師器	坏	13.6	9.0	3.8	黄褐色～ 暗赤褐色	暗赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00039
13 第18図	SE35	土師器	坏		8.8	(2.7)	橙色～ 赤褐色	淡橙色～ 黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00038
14 第18図	SE35	土師器	坏		6.0	(2.4)	淡橙褐色	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00042
15 第18図	SE35	土師器	皿	19.8	16.2	3.1	橙 色	橙 色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00037
16 第18図	SE35	土師器	薬壺	7.6		(5.4)	赤褐色	暗褐色～ 黒灰色	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母 微砂粒		199811 -00045
17 第18図	SE35	土師器	小壺		5.5	(2.5)	橙 色	橙 色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部ヘラ切り離し 外面に引っ掻き傷あり	199811 -00044
18 第18図	SE35	土師器	高坏			(10.2)	橙 色	橙 色	ヨコナデ シボリ	ヨコナデ シボリ	多量の赤色粒子 微砂粒		199811 -00047
19 第18図	SE35	土師器	高坏		10.0	(4.2)	黄褐色～ 淡橙色	黄褐色～ 淡褐色	ケズリ	ケズリ	微砂粒		199811 -00048
20 第18図	SE35	土師器	鉢	22.0		(11.0)	黄褐色～ 橙褐色	黄褐色～ 橙褐色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒		199811 -00046
21 第18図	SE35	土師器	脚	(18.6)	4.0	3.2	淡橙褐色	淡橙褐色	刷毛目 ナデ押え	刷毛目 ナデ押え	刷多量の角閃石 微砂粒		199811 -00049
22 第18図	SE35	土師器	甕	23.4		(13.0)	暗黄褐色	暗黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 3mm程度の砂粒		199811 -00052
23 第18図	SE35	土師器	甕	19.1		(5.3)	橙褐色	橙褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ケズリ	赤色粒子 角閃石・細砂粒		199811 -00053
24 第18図	SE35	土師器	甕	23.8		(14.1)	明褐色	明褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ケズリ	細砂粒	把手付 角閃石含まず	199811 -00051
25 第18図	SE35	土師器	鍋	30.2		(8.4)	明褐色	淡赤褐色	ヨコナデ ナデ押え	ヨコナデ ナデ押え	金雲母 細砂粒	外面に煤付着 角閃石含まず	199811 -00050
26 第20図	SK30	土師器	皿	17.0	13.5	1.9	淡褐色	淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00036
27 第20図	SK30	土師器	坏		7.9	(2.3)	淡褐色～ 黒灰色	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199811 -00034
28 第20図	SK30	土師器	椀		10.4	(1.1)	橙 色	淡橙褐色		ヨコナデ	多量の赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ 削出し高台	199811 -00033
29 第20図	SP78	土師器	小皿	8.6	6.0	0.6	淡橙褐色	淡橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の角閃石 微砂粒	底部糸切り	199811 -00063
30 第20図	SP68	白 磁	碗			(3.7)	オリーブ色 を帯びる	オリーブ色 を帯びる	ケズリ	ヨコナデ	黒色粒子を含む 白色粘土	碗V類	199811 -00061

V. 第6次調査



第22図 第6次調査遺構配置図 (1/100)

a. はじめに

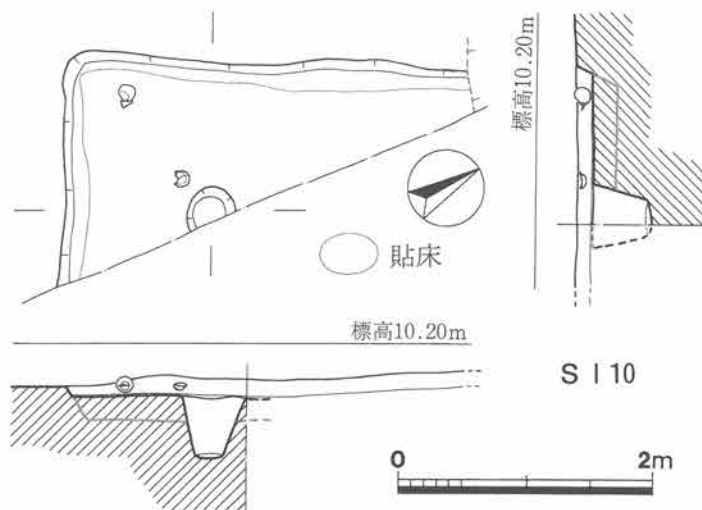
事務所建設に先立ち、226㎡を調査した。調査区の中央付近は粘土採掘、及び旧倉庫の基礎等によって大きく攪乱を受けている。遺構の密度は全体的に希薄で、南側で竪穴住居・土坑等を検出した。層序は、アスファルト・バラスの下に灰色土が20cm堆積し、その下に黒色土が20cm堆積する。黒色土中には遺物がほとんど認められない。遺構検出面は褐色土で、30cm程度掘り下げると黄色粘土層に達する。

b. 検出遺構と出土遺物

竪穴住居1軒・土坑2基・ピットを検出した。遺物は全体でパンコンテナー2箱程度が出土したが、大半がSK15からの出土である。

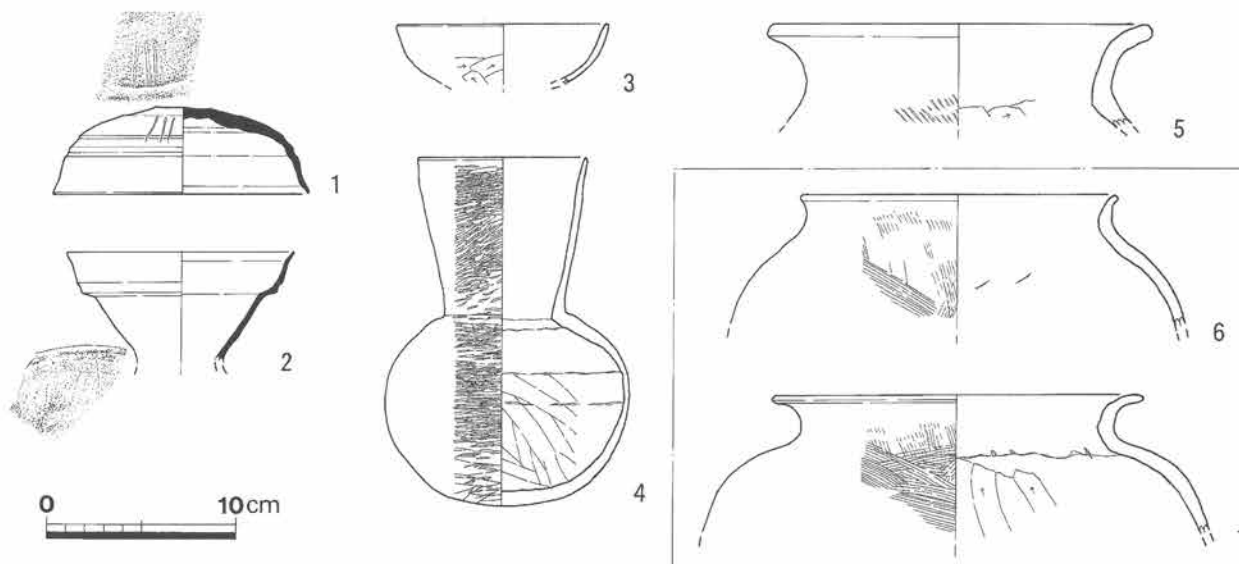
竪穴住居

S I 10 (第23図, 図版10) 調査区の南東隅に位置する住居跡で、コーナー部分のみを検出した。全容は不明であるがおそらくは4本柱の方形プランを呈するものと考えられる。埋土は黒色土で浅く、その下位には貼床と考えられる黒色土と褐色土混じりの層が20cm程度堆積していた。柱穴は1カ所のみ確認され、径40cm、深さ50cm程度の円形を呈する。出土遺物の内訳は須恵器蓋1、甕1、土師器碗1、壺1、甕12点のみである。6世紀後半の住居である。



第23図 S I 10実測図 (1/60)

S I 10出土遺物 (第24図, 図版11) 1は須恵器蓋で、焼成時の歪みが見られるものの、全体に丁寧な作りである。天井部は回転ヘラケズリでヘラ記号が認められる。3は底部に手持ちヘラケズリを施す碗。4は壺で胴部は球形を呈し、外面にはきめ細かい丁寧なミガキが施される。器壁は薄く、胎土は精良。

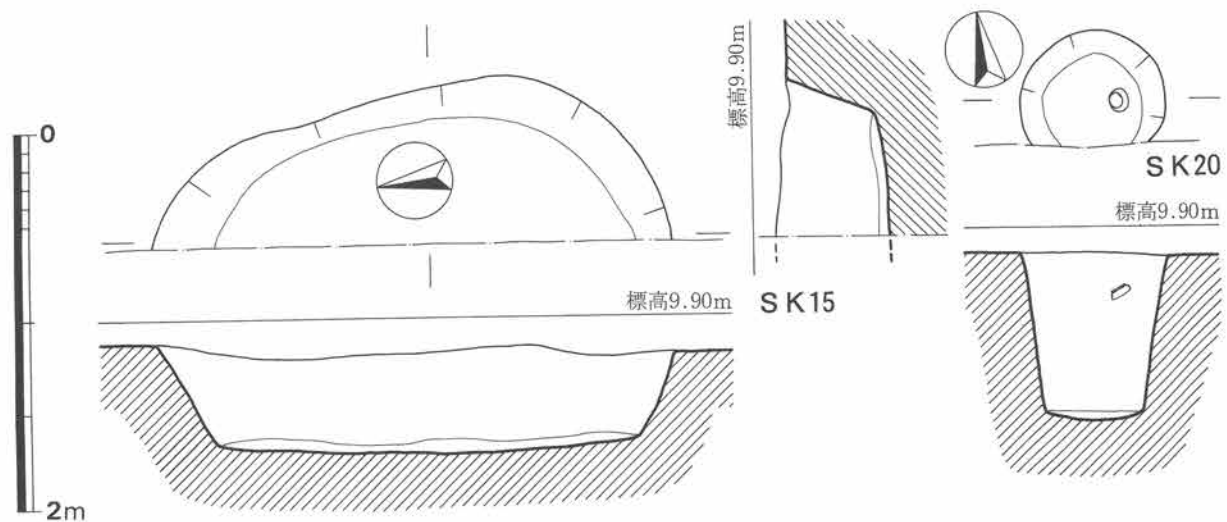


第24図 S I 10・SK 15出土遺物実測図 (1/4)

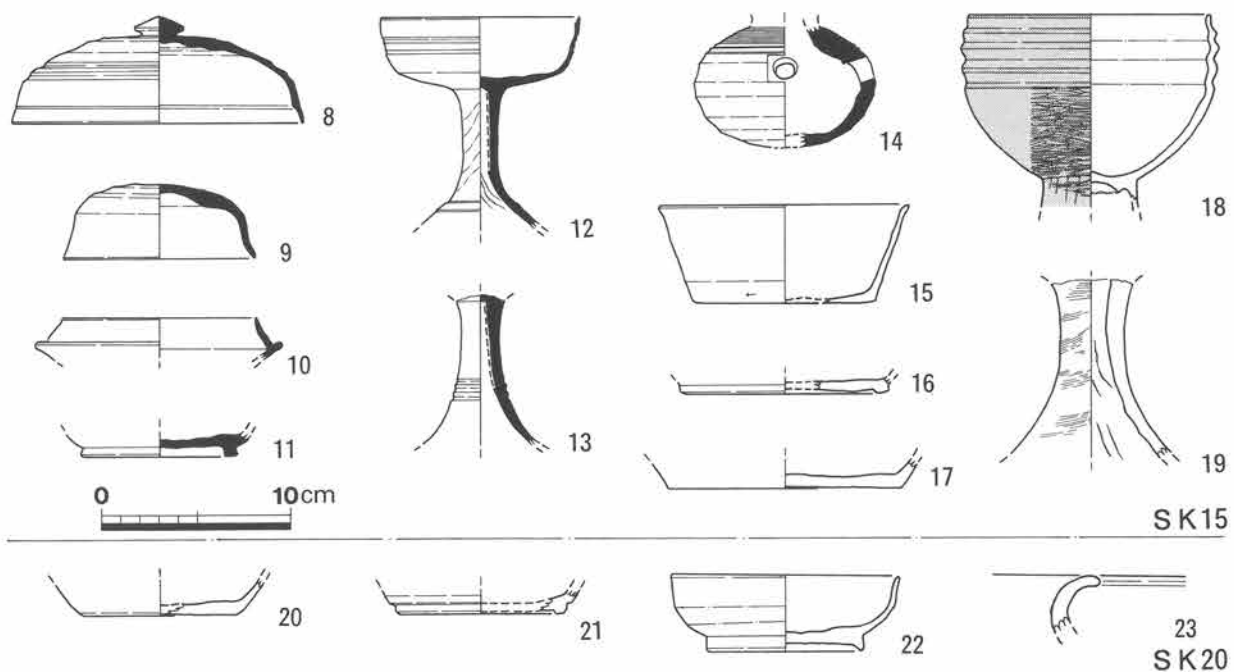
土坑

SK15 (第25図, 図版10) 調査区南西隅で検出した土坑で、長軸3m程度の楕円形を呈し、深さは50cm程度を測る。埋土は少量の褐色土ブロックを含む黒色土で、パンコンテナー1箱程度の遺物が出土し、大半が土師器で、須恵器は破片を含めても22点のみである。土師器では甕類が多く出土している。出土遺物中には6世紀半ばの資料も一部認められるが、大半が8世紀中頃～後半の資料であり、この時期の土坑と考えられる。

SK15出土遺物 (第24・26図, 図版11) 8はつまみを有する蓋で、有蓋高坏に伴うものと考えられる。色調は明赤褐色～小豆色を呈する。9は口縁部がわずかに外反するタイプの蓋で、天井部は回転ヘラケズリを施す。10は受け部を持つ坏身、11は低い高台を有する坏で底部はヘラ切り。12・13は高坏。14は扁平な球状を呈する甕で、肩部にカキ目を施す。15は坏で口縁端部がわずかに外方へ折れる。また体部下半に



第25図 SK15・20実測図 (1/40)



第26図 SK15・20出土遺物実測図 (1/4)

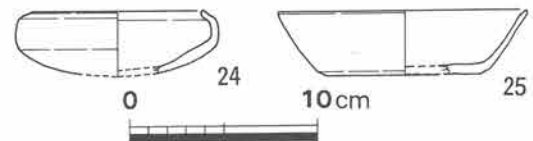
は回転ヘラケズリを施す。16は削り出し高台の椀。胎土には微量の角閃石を含む。高台径から推して大型の部類に含まれる。17は鉢と考えられ、底部は回転ヘラケズリを施す。18は深い坏部を有する高坏である。口縁部付近には顕著な凹凸が認められ、下半は丁寧なヘラミガキを施す。また柱状部には縦方向の削りを施す。胎土は概ね精良で、外面には赤色顔料もしくは化粧土が掛けられる。19は高坏の柱状部で外面には刷毛目の痕跡が認められる。

SK20 (第25図, 図版10) 調査区南西隅で検出したピット状の土坑で、土坑と呼ぶよりはむしろ柱穴に近い形状を呈する。平面プランは径70cm程度の円形を呈し、深さは90cm余りを測る。20cm程度掘り下げた段階で土師器椀が出土したが、原位置は止めていない。底部ヘラケズリの坏類が多く出土していることから8世紀後半の遺構とも考えられるが、上層出土の椀から見て10世紀中頃の所産とも考えられる。

SK20出土遺物 (第26図, 図版11) 20は底部ヘラケズリの坏で、体部との境に面取りを施す。また底部中央にはヘラ切り離し痕が認められる。21は削り出し高台の椀。22は浅い椀で、体部は緩やかに屈曲しながら立ち上がる。底部はヘラ切り離し。23は甕の口縁部である。

ピット

ピット出土遺物 (第27図, 図版11) 24は丸底の坏で、底部は回転ヘラケズリ。口縁部は内側に折れる。色調は黄褐色を呈する。25は坏で底部は回転ヘラケズリ。体部と見込みとの境は明瞭である。



第27図 ピット出土遺物実測図 (1/4)

c. 小 結

調査区の半分以上が粘土取りによる掘削を受けているため、遺構の配置については正確に把握し難い。しかしながら、全体的に遺構の密度が低い点は特徴として挙げることができる。竪穴住居 (S I 10) は6世紀後半に比定できるもので、古墳時代の住居としては周辺域では初めての検出例である。またSK15は8世紀中頃～後半の土坑であるが、古墳時代の遺物もまとまって出土しており、この辺りに該期の居住域が存在するものと考えられる。

出土遺物はパンコンテナー2箱程度であるが、相対的に見て供膳具の占める割合が高いようである。

第4表 第6次調査出土遺物観察表

遺物No	出土遺構	材質	器種	法 量			色 調		調 整		胎 土	備 考	遺物登録番号
				口径 (長)	底径 (幅)	器高 (厚)	外面	内面	外面	内面			
1 第24図	S I 10	須恵器	蓋	13.6		4.6	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	3mm程度の砂粒	天井部回転ヘラケズリ 天井部にヘラ記号あり	199817 -00007
2 第24図	S I 10	須恵器	甕	12.0		(5.9)	明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	波状文	199817 -00008
3 第24図	S I 10	土師器	椀	11.2		(3.3)	橙 色	橙 色	ヨコナデ	ヨコナデ	細砂粒	底部手持ちヘラケズリ	199817 -00004
4 第24図	S I 10	土師器	壺	9.0		18.4	黄褐色～ 橙色	淡黄褐色～ 橙色	ミガキ ケズリ	ケズリ ヨコナデ	金雲母 微砂粒		199817 -00003
5 第24図	S I 10	土師器	甕	20.2		(5.4)	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	金雲母 4mm程度の砂粒		199817 -00005
6 第24図	S K 15	土師器	甕	16.6		(7.2)	明褐色	明褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	角閃石 細砂粒		199817 -00009
7 第24図	S K 15	土師器	甕	19.4		(7.5)	淡橙色～ 淡灰色	淡橙褐色	ヨコナデ 刷毛目	ヨコナデ ケズリ	金雲母 細砂粒		199817 -00011
8 第26図	S K 15	須恵器	蓋	15.4		5.7	明赤褐色～ 小豆色	明赤褐色～ 小豆色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒	天井部回転ヘラケズリ	199817 -00024
9 第26図	S K 15	須恵器	蓋	10.1		4.0	淡橙褐色～ 明灰色	明灰色	回転ナデ	回転ナデ	5mm程度の砂粒	天井部回転ヘラケズリ	199817 -00026
10 第26図	S K 15	須恵器	坏	10.1		(2.2)	薄青灰色	薄青灰色	回転ナデ	回転ナデ	微砂粒		199817 -00027
11 第26図	S K 15	須恵器	椀	8.2		(1.3)	淡灰色	淡灰色	回転ナデ	回転ナデ	細砂粒	底部ヘラ切り離し	199817 -00028
12 第26図	S K 15	須恵器	高坏	10.6		(11.2)	明灰色	暗紫色	回転ナデ シボリ	回転ナデ シボリ	4mm程度の砂粒		199817 -00029
13 第26図	S K 15	須恵器	高坏			(7.9)	暗灰色	暗灰色	回転ナデ	回転ナデ シボリ	細砂粒		199817 -00030
14 第26図	S K 15	須恵器	甕			(6.4)	黒灰色	暗青灰色	回転ナデ カキ目	回転ナデ	細砂粒	底部回転ヘラケズリ	199817 -00031
15 第26図	S K 15	土師器	坏	13.2	9.6	5.2	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199817 -00018
16 第26図	S K 15	土師器	椀	11.0		(0.9)	濁褐色	濁褐色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	微量の角閃石 微砂粒	底部回転ヘラケズリ 削出し高台	199817 -00019
17 第26図	S K 15	土師器	壺	12.4		(1.6)	橙 色	淡橙色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199817 -00017
18 第26図	S K 15	土師器	高坏	12.7		(10.2)	赤褐色	淡橙色	ヨコナデ ケズリ、ミガキ	ヨコナデ ナデ押え	細砂粒 精良	外面丹塗り	199817 -00020
19 第26図	S K 15	土師器	高坏			(9.4)	橙 色	橙 色	刷毛目	シボリ	赤色粒子 細砂粒		199817 -00021
20 第26図	S K 20	土師器	坏		7.9	(2.0)	淡橙色～ 淡灰色	淡橙色～ 淡灰色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ	199817 -00036
21 第26図	S K 20	土師器	椀		9.1	(1.3)	暗灰褐色	淡褐色	ヨコナデ ヘラケズリ	ヨコナデ	赤色粒子 微砂粒	底部回転ヘラケズリ 削出し高台	199817 -00037
22 第26図	S K 20	土師器	椀	12.1	8.3	4.2	淡橙色	淡橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	多量の赤色粒子	底部ヘラ切り離し	199817 -00034
23 第26図	S K 20	土師器	甕			(3.1)	明黄褐色	明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	金雲母 細砂粒		199817 -00038
24 第27図	S P 5	土師器	坏	9.0	10.2	(3.4)	黄褐色	黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ押え	金雲母 細砂粒	底部回転ヘラケズリ	199817 -00001
25 第27図	S P 22	土師器	坏	13.1	8.0	3.4	暗褐色	暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	赤色粒子 金雲母	底部回転ヘラケズリ	199817 -00039

VI. ま と め

今回の第4・5・6次調査では古墳時代から平安時代に至る遺構・遺物が確認された。ここでは時代別に概観し、今回の報告のまとめとしたい。

古墳時代 第6次調査で竪穴住居1棟が確認されたのみである。この住居は6世紀後半に比定されるもので、近接する後世の土坑からもほぼ同時期の遺物がまとまって出土している。周辺域における該期の集落の検出は初めてであり、積極的な根拠はないものの、あるいはこの集落の住人が二子塚古墳などの築造に深く関与していることも考えられる。

飛鳥～奈良時代 集落がピークを迎える時期である。竪穴住居・掘立柱建物・井戸・土坑・溝が検出されたが、最も注目されるのは竪穴住居の検出である。荒木町を含む大善寺町・安武町といった旧三潞郡域では該期の集落が幾つか確認されているが、いずれも竪穴住居を持たず、掘立柱建物のみで構成されている。仮に竪穴住居が存在しても、安武地区遺跡群内の酢正免遺跡^{註(1)}や東鳥遺跡^{註(2)}に見られるように単独で存在し、数棟がまとまって検出されることは皆無であった。このような状況の中、第4次調査区だけでも4棟が確認されたことは重要な意味を持つものである。また竪穴住居から掘立柱建物への変移に加え、竪穴住居でも支柱穴（4本柱）を有する住居から支柱穴を持たない住居への変遷までも想定できるなど、居住形態の変化が端的に現れている事例と言えよう。同様の事例としては筑後国府跡の東方に位置する神道遺跡^{註(3)}で最も典型的な変遷が看取されている。

次に第4次調査S I 30の柱穴から出土した土師器碗についてであるが、Ⅲ章でも述べたように地鎮めに伴う遺物とは考え難く、柱抜き取り後に意図的に埋納されていることから、住居の廃絶に伴う祭祀行為の一例として位置付けられよう。廃絶の時期は床面出土の須恵器坏身から見て7世紀第3四半期頃と考えられる。類例については寡聞にして知らないが、類似資料に関するご教示を頂ければ幸いである。

平安時代 10世紀半ばと12世紀代の遺構が確認された。前者は溝と土坑が存在するのみで、遺物量は極めて少なく、集落構造までは言及し得ない。一方、12世紀代の遺構も溝が2条認められるのみであるが、第2・3次調査でも南北に走行する溝が確認されているなど、第4次調査SD10の東側に屋敷等が広がる可能性が高い。出土遺物は瓦器碗が主体で糸切り離しの碗も見られるが、土師器では糸切り底は見られない。また輸入陶磁器は白磁が数点出土しているのみで極めて少ない状況である。溝の埋没時期は12世紀前半と考えられる。

以上、簡単に整理してきたが、本遺跡の主体となる時期は飛鳥～奈良時代であり、該期の集落の中心部分は今回の調査区よりもやや東方に位置するものと考えられる。また第3次調査の成果も含めて考えるならば、丹塗土器が非常に多く出土していることが特徴として挙げられ、単なる一般集落とは考え難い。未だ郷としての実態はその機能も含めて明らかになっていないが、本遺跡が「荒木郷」の一角を占めていることには変わりなく、今後はどのような形で律令制度の末端機関に組み込まれていたのかを検証する必要があるだろう。

註(1) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅲ』久留米市文化財調査報告書第64集 1990年

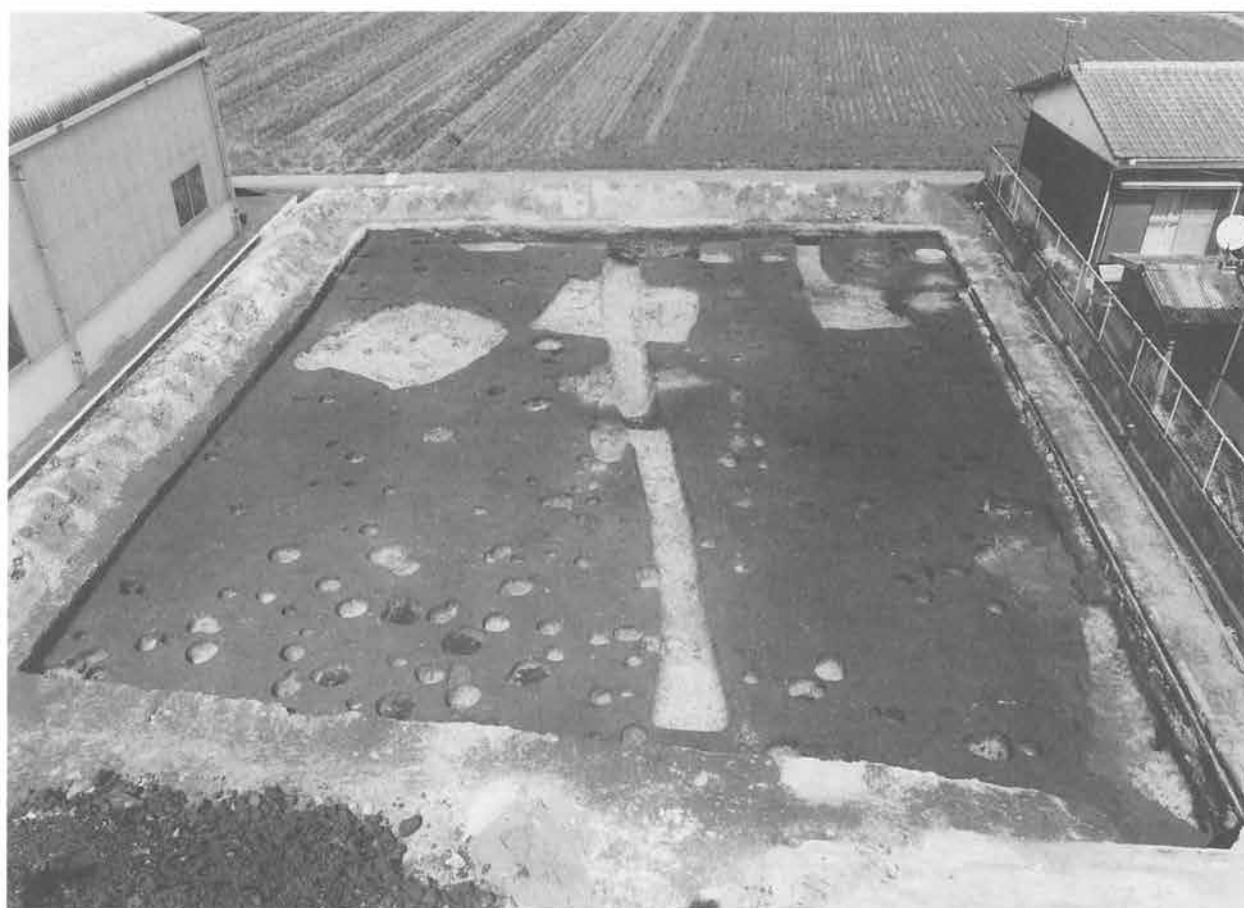
註(2) 久留米市教育委員会『安武地区遺跡群Ⅺ』久留米市文化財調査報告書第128集 1997年

註(3) 園井正隆「神道遺跡」『久留米市史』第12巻資料編（考古） 1994年

報 告 書 抄 録

ふりがな	しらくちきょうづかいせき ーだい4・5・6 じちようさー							
書 名	白口経塚遺跡 ー第4・5・6次調査ー							
シリーズ名	久留米市文化財調査報告書 第147集							
編 著 者 名	白木 守							
編 集 機 関	久留米市教育委員会 教育文化部 文化財保護課							
所 在 地	☎830-8520 福岡県久留米市城南町15-3 ☎（0942）30－9225							
発行年月日	1998（平成10）年12月28日							
ふりがな	ふりがな	コ ー ド		北緯 °//	東経 °//	調査期間	調査面積	調査の原因
所収遺跡名	所 在 地	市町村	遺跡番号					
しらくちきょうづかいせき 白口経塚遺跡 だい 4 じちようさ 第 4 次 調 査	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 あらきまちしらくちあぎまへうづか 荒木町白口字経塚	40203	030814	33度 16分 26秒	130度 30分 07秒	1998.2.23～ 1998.3.23	342m ²	倉庫建設
しらくちきょうづかいせき 白口経塚遺跡 だい 5 じちようさ 第 5 次 調 査	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 あらきまちしらくちあぎまへうづか 荒木町白口字前原	40203	030814	33度 16分 24秒	130度 30分 01秒	1998.6.15～ 1998.7.2	120m ²	給油所建設
しらくちきょうづかいせき 白口経塚遺跡 だい 6 じちようさ 第 6 次 調 査	ふくおかけんく る め し 福岡県久留米市 あらきまちしらくちあぎまへうづか 荒木町白口字経塚	40203	030814	33度 16分 26秒	130度 30分 05秒	1998.8.3～ 1998.8.10	226m ²	事務所建設
所収遺跡名	種 別	時 代	主 な 遺 構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
第 4 次 調 査	集落跡	飛鳥～ 奈良	竪穴住居	4棟	土師器、須恵器		7世紀後半の竪穴住居の 柱穴から、土師器碗5個 体が出土した。	
			掘立柱建物	3棟				
	集落跡	平 安	土 坑	3基				
第 5 次 調 査	集落跡	飛鳥～ 奈良	溝	2条	土師器、瓦器、白磁		特になし	
	集落跡	平 安	溝	1条	内黒碗			
第 6 次 調 査	集落跡	古 墳	竪穴住居	1棟	土師器、須恵器		特になし	
	集落跡	奈 良	土 坑	1基	土師器、須恵器			
	集落跡	平 安	土 坑	1基	土師器			

圖 版



(1)第4次調査区全景（南から）



(2)S D10⑧土層断面（南から）



(3)S D10⑨土層断面（南から）

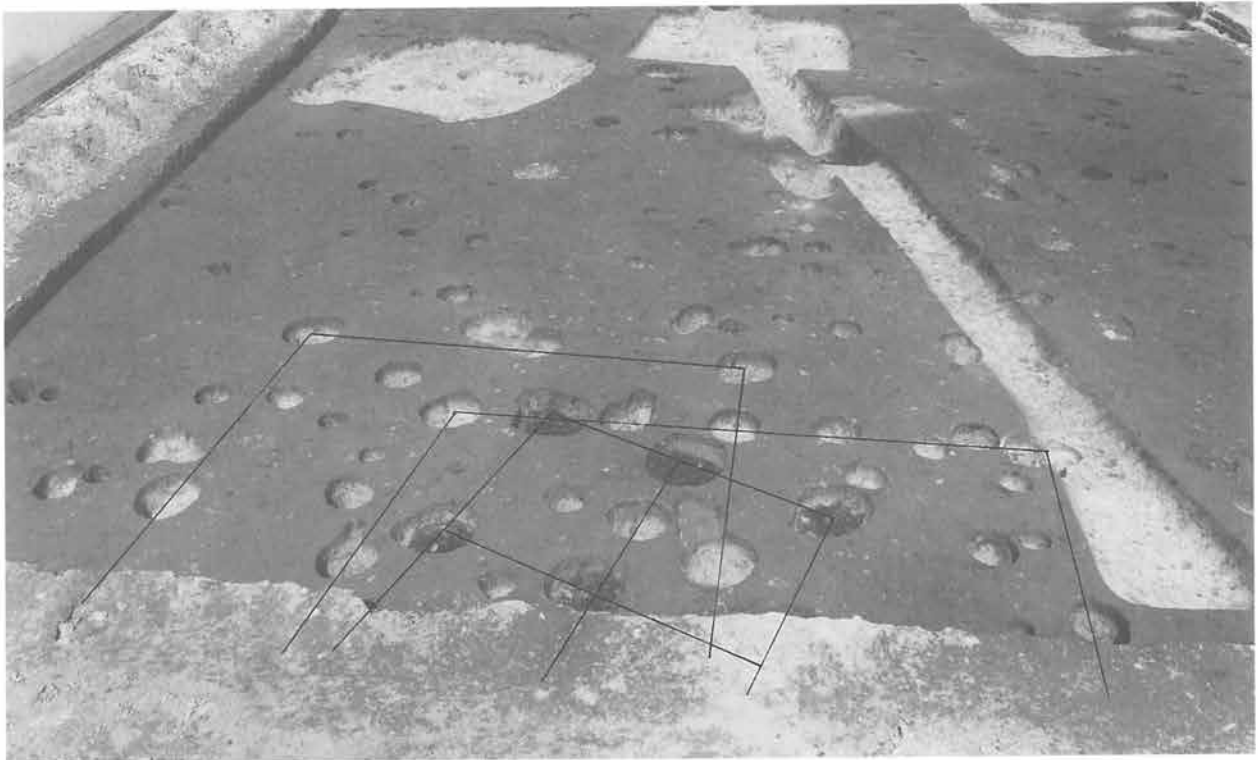


(4)S D10全景（南から）



(5)S D50土層断面（南から）

図版 2



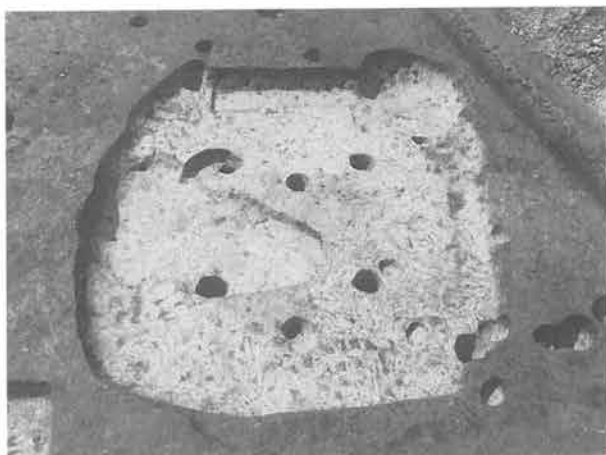
(1) S B 95・100・105全景（南から）



(2) S B 100完掘状況（北西から）



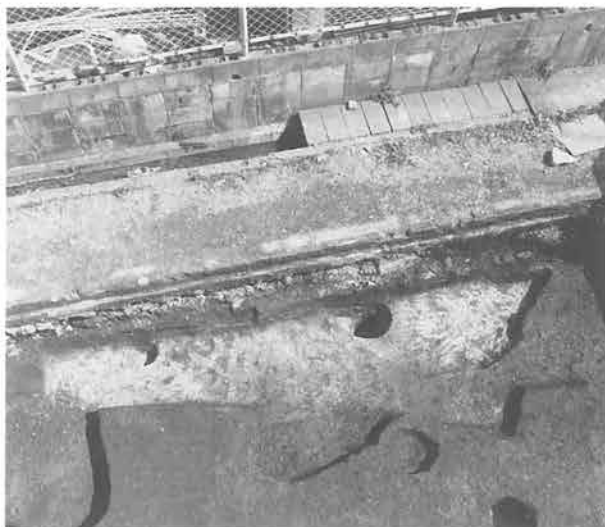
(3) S I 20完掘状況（東から）



(4) S I 30完掘状況（北東から）



(5) S I 30・P 1 遺物出土状況（南から）



(1) S I 90 完掘状況 (西から)



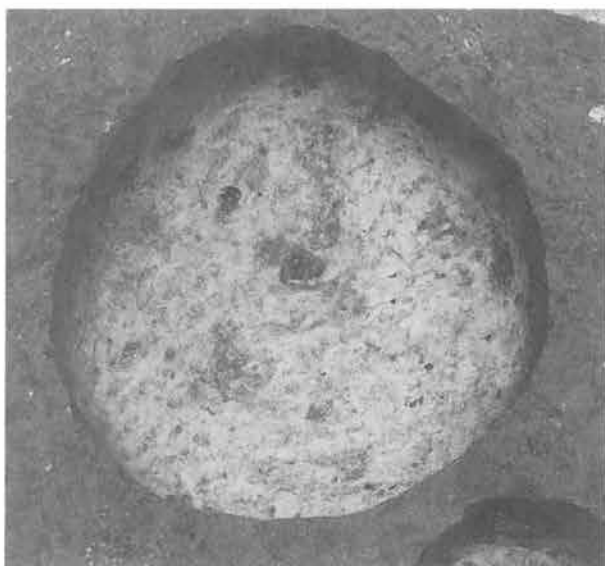
(2) S K 15 遺物出土状況 (南から)



(3) S K 45 土層断面 (南から)



(4) S K 45 完掘状況 (西から)

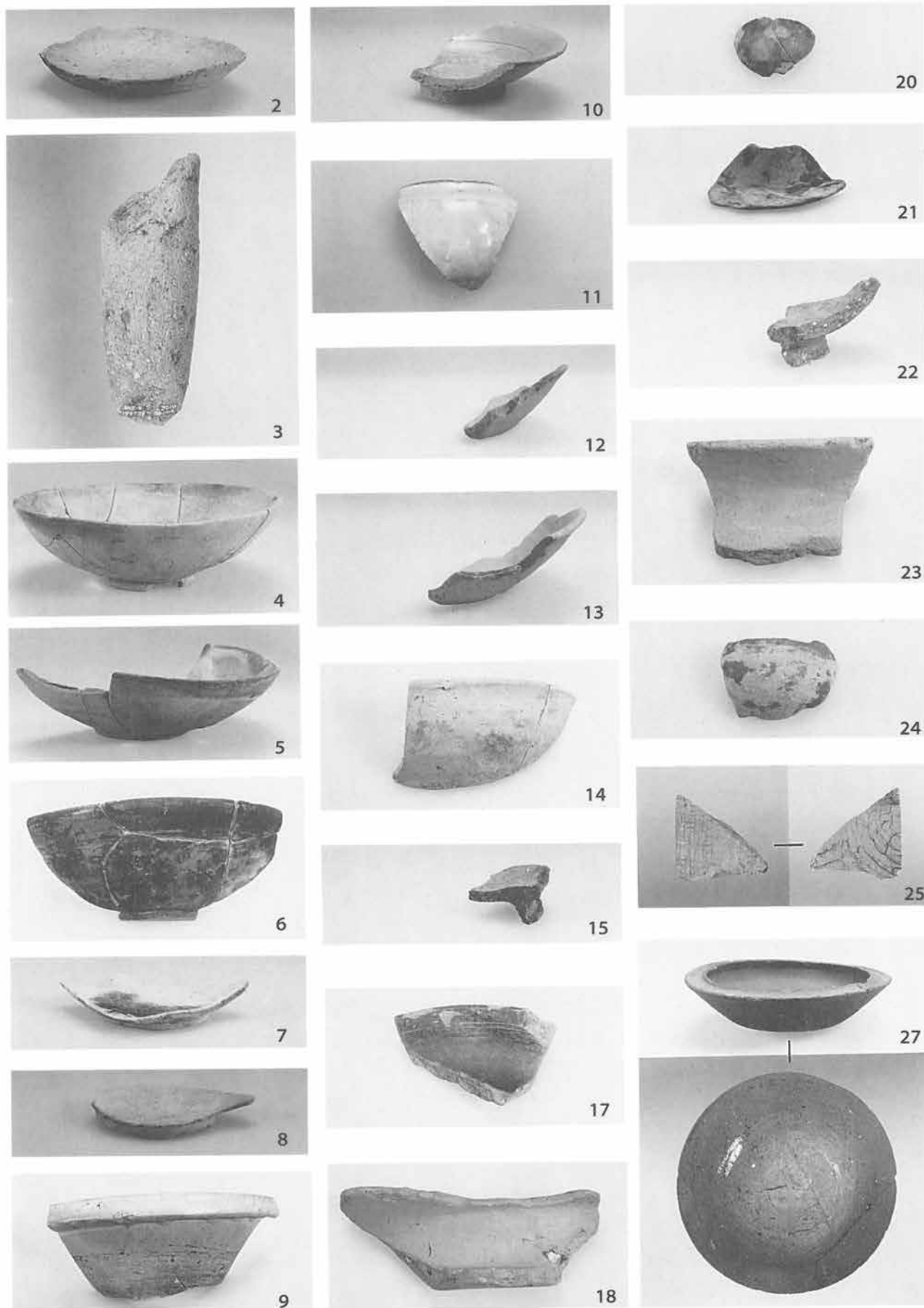


(5) S K 25 完掘状況 (南から)

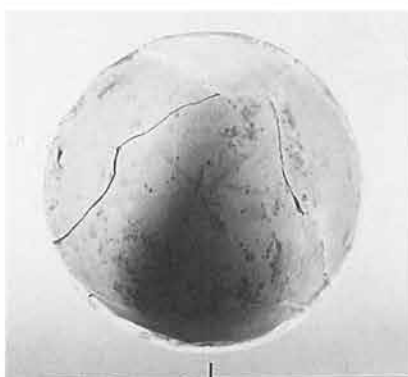


(6) 作業風景 (北から)

図版 4



第4次調査出土遺物(1)



図版 6



(1)第5次調査区全景（北から）



(2)第5次調査区全景（東から）



(1) S D 5 ④土層断面 (南西から)



(2) S D 5 完掘状況 (南西から)



(3) S P 10 礫検出状況 (東から)



(4) S P 15 礫検出状況 (西から)



(5) 調査区を南から望む (南から)



(6) 水没した調査区 (北東から)

図版 8



2



12



13



14



22



23



5



17



6



24



25



7



18



8



28



10



19



29



11



21



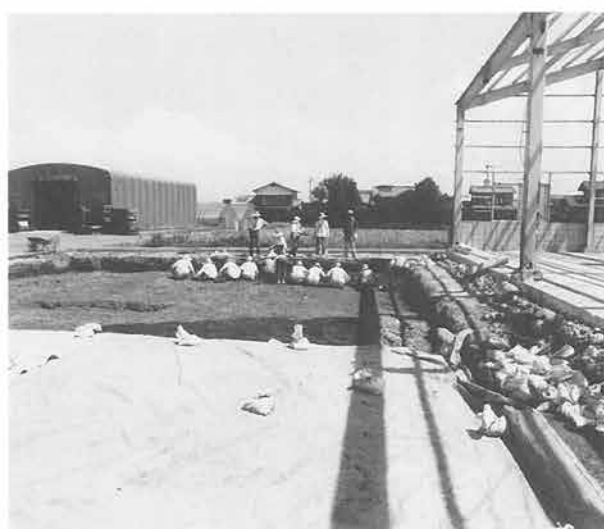
29



(1)第6次調査区全景（南から）



(2)重機による表土剥ぎ風景（東から）



(3)作業風景（南から）



(1) S I 10土層断面 (南から)



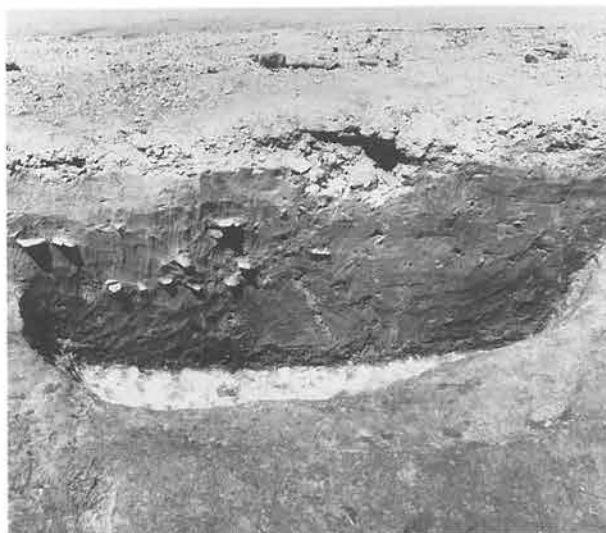
(2) S I 10遺物出土状況 (南から)



(3) S I 10完掘状況 (西から)



(4) S K 20遺物出土状況 (南から)



(5) S K 15土層断面 (東から)



(6) S K 15完掘状況 (東から)



1



8



16



2



9



17



4



11



18



5



12



19



6



13



22



7



14



24



25

白口経塚遺跡―第4・5・6次調査―

(久留米市文化財調査報告書 第147集)

平成10年12月28日

発 行	久 留 米 市 教 育 委 員 会
	久 留 米 市 城 南 町 15 - 3
編 集	教育文化部 文化財保護課
印 刷	中 央 印 刷 株 式 会 社
	久 留 米 市 瀬 下 町 3 8